

● HAIKU200001 ganjitu

お元日目許賢き鳩が来て
浅黄空一茶の國へ通ず道
極月の定かなる香の満てる花舗
定年を一年前の年逝かす
定年を迎ふその年明けんとす
フルーツパーラーポインセチアに隣る席
葉牡丹小鉢なにごん景気振はずよ
頭はなる瘤の櫛の朴念仁
年忘れバタヤン推参致しけり
雲の峯程に商魂逞しき
冬將軍北風の助言を聞き入れて
泥縄の一年が又始まり
妙案の浮かべることく柚子湯の柚
山勘を頼りに句為す年始め
宿題を三つ四つ抱え年を越す
一頃の真心（ひたごころ）欲しホ句始め
歳旦吟踏まえ所が大事なり
世慣れたる句は敬遠すホ句始め
よろこび事かなしみ事を上回る
わが発句種切れの年迎へけり
鼻の如くに思ひ当る顔
申し出ることくに年の改まる
いつも真剣鼻の武張る顔
足を止め思ひ止どまる年ならず
遣り込めて遣り込めらるる爛熟し
寄る年をうつちやるごとく逝かせけり
冬帝の顔立ちしるき朝なり
昇天の辛（かのと）の龍に乗じけん
内々の話にも触れ菊脛
定年と隣り合わせの年迎ふ
紋切り型賀状ばかりが来る世なり
鼻の真に受けし貌そこにあり
年の尾を切落とす北風吹きにけり
ニュアンスを変へて小藪の笹子鳴く
付けたりのケキョの一二声藪鶯
ひととおり段取りつけねば年の内
お座なりに迎えてならぬ年なりけり

ござつぱりして定年を迎ふ年
ぎごちなく瑞鹿山の笹子鳴く
茶漬けなどして年の瀬の昆布巻
言付かる蓮葱牛蒡忘れまじ
向き直り更に一献年の酒
膝立てて更に一献年忘れ
しやら咲けば定年族に仲間入り
型通り注連飾り了へ夕迫る
尻上りよくなる年を逝かせけり
物分りよき句も人も屠蘇も駄目
一日の日が差す何等変りなく
待望の景気上向く年ならず
年立って景気まだまだ手弄（まさぐ）り
踏ん切りのつかぬまま年逝かせけり
脱稿の目途立たぬまま年越せり
時節柄小振りな松を飾りけり
赤ら顔酒呑童子となり年酒
初雀こらこら菜つぱ引張るな
玄冬の昆布に足れる茶腹かな
歳末商戦モール飾りに精出せり
変り種シクラメンなど玄関に
ごまめ等もう嚙めぬ歯を儂めり
年の瀬の煤ばむ顔を剃られをり
定年後の妻とのスイートホームの春
食積の品数減りぬ箸休め
ごまめ等もう駄目老ひのガタガタ歯
傍目にはみみずに見える賀状あり
心臓病み風邪をひいたら百年目
炎吐く龍の茶目つ気賀状くる
龍となり春の瑞氣を取り込まん
十二月ごたごた事を溜め込めり
立っ年にやり残すこと持込めり
干支の龍瑞氣靈氣を搔つ込めり
龍年の龍に定年ありおかし
龍年の龍定年を怪しめり
逝く年もその内に入る物惜しみ
休み休みゆく通院の枯木道
徒浪に揉まれつつ来て終る年
十人並み辰にして屠蘇祝ふかな

そのときはそのときと年送り来ぬ
脂身の脂抜けたる年男

去年今年心臓病を背負い込めり

天降りくる歳旦吟を空頼み

年酒して赤熊（しゃぐま）のごとく目が
すわり

思う様筋噛み切れぬ筋子なり

次はこの慈姑の親玉芋頭

年男さすれば龍となり舞はん

土壇場で龍に振り落とされし夢

気丈夫な龍の賀状を貰ひけり

あけすけに人の粗云ふ爛熱し

柊の徒ならぬ花の数

侘寝して風邪抜け去るを待てるのみ

胸傷の縦一文字冬至湯に

時代物演歌ニ番年忘れ

受け止むる年は大きな拾ひ物

着膨れのもたもた脱いで診察室

水仙は花を忘れて絵空事

身勝手を通して貰ふ来る年も

試し刷り龍の賀状をおしゃやかにす

禁物の風邪引きし身を診てもらふ

抜き放つだんびらのごと年立てり

木洩れ日に利発さうなる椿の實

枇杷咲かせいよいよ所帯染みにけり

行き違ひままあることよ年詰まる

初夢に畑違ひの時評書く

人は人吾は吾の目年立てり

身綺麗になりて辰年迎へけり

鮮紅のサーモン切身聖夜くる

小綺麗になりて晦日の床屋出づ

ポケットに釣銭溜る十二月

独り相撲取り来し年とおもひをり

雪降ると鴨の口添えありにけり

一本気の人の本読む年の内

鼻風邪に茶碗出す手も力無げ

神業の賀状の龍に魅入りけり

千里眼年神霞む野に立てり

年立つと辛の龍の千里眼

着古しの着易ければと三が日

品薄の葉牡丹一つ選るとせり

切返すごとくに年の立ちにけり

リラックスリラックスして年迎ふ

鼻の眼力欲しや初句会

あらたまのじぶんの耳目二本足

天井の海老のいい色年暮るる

煤逃げもせず家内に籠もりゐる

「その内」はもう目の前に十二月

一ひねりの筈がどっこい初相撲

女郎蜘蛛こんなところで年迎え

天の邪鬼とつちめくれむ年忘れ

灌木をずいと見上げぬ懐手

天気図に龍（タツ）の目玉の高気圧

餛飩腹やがて餅腹かこつ日々

鍋焼餛飩ふうふうやりて年逝かず

通りがけ目と目が合ひぬ師走猫

乗り出して湯を揉むことも初湯殿

日向ぼこ興ず心は珠なせり

世紀末黒澤映画年終わる

晩年の始めとおもふ年籠

かさつける五体にじんわり冬至の湯

初御空めでたき羽音ふりかぶり

煙草買ひに一度出たきり冬籠

クリスマス近き日しやれたグラス買ふ

年の瀬の本屋いつものコーナーに

言葉にも矯め方があり福寿草

柚子湯して柚子より軽く浮ける身の

歳を取ることはよきこと柚子湯けふ

柚子湯の柚寄れる胸元明るめり

一卷の終りの寒ンにご用心

年の瀬の市役所の窓拭き込みて

新橋の奥の細道年忘れ

実家から千両貰ふを做ひとす

千両もて玄閼飾り立てにけり

圧力鍋奮闘続く小晦日

大年の本にも倦めば何とせう

買ひ置ききの焼栗つまみ年籠

どれも皆読みさしの本年詰まる

大年の日差しの移る一間かな
大年の空見渡して引つ込みぬ
鏡餅ことし奮発したりけり
めいっばい夫婦着込みて年の旅
初御空妻は格別富士が好き
元旦の旦の容に初日影
掌が飛んで来るなり歌留多取

● HAIKU20001sono1

落葉降る日蔭に降れば日蔭の音
面白いやうに木の葉を落とす鳥
ざつと見ていちいちは見ぬ落葉
山茶花のガタツと来るはいと速し
山茶花も人もいずればガタツと来
公園の日向の黄葉鳥賑はふ
おいそれと返事も出来ず帰り花
おでん種曰の大根をたばさみぬ
御所車それに役者もおでん酒
さざんかにひやひやと夕至りけり
極月のとある昼餉のうどん腹
煙草屋の婆ちやん健在寒いねえ
糞る犬のすまなさうなる貌に冬日
小六月寄り来る鯉に興動く
わだかまりとある日解けて返り花
閑散の中に華やぐ宮落葉
いちちはやく辛夷は冬芽用意せる
しろしろと枝の切口冬空に
冬服のポケットにある底の塵
鶯のさわりが板に付きにけり
産土の鳩が空切り十二月
石造り鳥居を潜り冬紅葉
宮鳩の落葉に脚を引っかけぬ
師走妻いったんみかん置きゆけり
水栽培針の根降ろすヒヤシンス
目端利く鴨の水辺に佇めり
食積のまづ柔らかきものつまむ
食積のかまぼこ春の色載せて
煮て焼いて正月料理お忙し
くろぐろと大つごもりの立木影
しろがねの冬木の枝に目を凝らす
年の湯にしづしづと臍沈めけり
おん母の目深にかぶる毛糸帽
初雀零れ移れり隣る木に
第九歌ふ誰も明眸瞳きて
果つるまであとどれ程の冬紅葉
黒づみて瑞鹿山の冬紅葉
海風に輪飾りからつと鳴りにけり

ジュラルミン光りに枯枝枯枝かな
あをぞらを渡る一鳥初雀
横向きに乙女のひらく初神籤
萱屋根の萱の呟く寒日和
春著の子磴百段を登りつめ
初鳩をぱつと挙げたる大臣山(おとどやま)
烏帽子して日の下手斧始かな
八百桶の囲める宮の初詣
あらたまの神籤に射せる白日差し
へし折れぬごまめであれば止めにけり
人波に旨く乗りけり初詣
優(やさ) 雑木葛の枯蔓引つ破り
枯蔓に六浦の海展けけり
初詣空がずんずん進みけり
ぴんぴんに空張りにけり枯柏
観音堂脇のかさかさ冬紅葉
紅葉寺鎌倉石は擦り減りし
擦り減りし鎌倉石に初日影
集め初め板東一番御朱印帖
観音堂紅葉し尽す立木中
初晴れに青菜その葉をひろびろと
乾らびたる土にぼとりと寒椿
切りぎしの風ひつふつとみそさざい
板東の一番札所冬紅葉
凍むまじく観音のあぐ燭よよと
黒凍みの毘沙門の杳邪鬼を踏む
堂凍むと毘沙門天のひんむく眼
堂凍みの毘沙門天の黒づくめ
臘梅の臘むる薄日差
ゆつくり行く北鎌倉の枯木空
人を見て鶉発てり梅もどき
紅梅のよくよく見れば弾け花
紅梅の日中にニッはじけ玉
北鎌倉かつて知つたる枯木道
冬枯のこの道ゆけば二階堂
宿木のここは鎌倉西御門
紅梅の膨らむ蒼見たるのみ
鈴の音を心に止むる初天神
蒼に目遣りて桜と知りにけり

初天神鈴もこころも打ち震ひ
大鉄鍋ひっくり返し初商
臘梅の臘薄き葉に日の透り
楠茂る境内手斧始かな
臘梅の何處か見たいろ爪のいろ
臘梅の一木離れ難きかな
厨房に拵がれる焰(ほむら)初商
シヤガールの二つ目の馬初夢に
シヤガールの鶏が囁く初夢に
一心に山の日集め枯拍
シヤガールの空中泳ぐ魚に手
裸木の力を溜むる寒日和
烏帽子して大漢手斧始かな
赤ん坊の笑ひ初めなり福は内
一陽来復赤子の笑みを振りまけり
海より二日の風に家震ふ
歳旦吟言葉の柱立てにけり
初雀来る気配して辺り見る
屑籠に二日の日差し移りけり
湘南の二日の空を風払ひ
葉牡丹のごとく広がる赤子の笑み
長男の初子真中に初写真
閑散と昼過ぐ路地に松立てて
初雀かさこそ使ふ廁紙
新刊書二三手にして年籠
よく韻く水を使へり初廁
腸(はらわた)の酔初め年が廻りけり
東京に出る用もなし軒雀
年の酒海鼠となりて眠りこけ
飾竹擦れ合ふ音に二日暮れ
風少し出でて擦れ合ふ飾竹
裸木の櫛の如菩薩仏菩薩
冬何の其の大楯の幹凶太
裸木の中の櫛の老大家
来る冬おうと迎へて櫛の巨軀
枯れ草道脚力大分弱りたる
かうもりのやうに枯るる葉ありにけり
猫じゃらし枯れ伏す夕日も頼りなげ
枯尾花いちめんの日に酔ふごとし

山道はすつかり日陰枯尾花
頭から風に崩るる枯葎
裸木となりゆく木々に素性あり
裸木の枝先の葉の震ひづめ
裸木を日の滑り落つ午後三時
裸木の光と蔭の部分かな
いつぽんの裸木の幹隆々と
身心も枯木も脱落せるはよし
櫛の葉日に丸まって枯木山
おーい枯櫛の空をゆく雲よ
灯が点り枯木の間のお西さま

小寒の雨降り仰ぎつつ独語
小寒の雨来て夜の例会あり
小寒の夜雨水上を進みけり
遠景に小寒の雨烟る街
夜に入りて小雨交りの寒の入
小寒の雨脚葉蘭濡らしけり
小寒の夜雨到る庭覗きけり
あたたかな雨伴ひて寒の入
鼻尖に小寒の雨あたたかき
例会果て夜雨に濡れゆく寒の入
小寒の雨降る闇に別れけり
小寒のきのふにつづく雨霽れて
松とれて深川鼠の川景色
久々にありし小雨に松とれて
寒入と眩き床に身を起こす
同じ頃目覚めし妻と初旦
はすかひに夕日差しけり初湯殿
枇杷の花日射し乏しくなりにけり
玻璃揺する二日の風を聞きゐたり
大玻璃に二日の埃浮きにけり
泣き初めの赤子ほいほいあやしけり
顔寒く目覚めて松も過ぎにけり
枝枝の交差せる空初景色
青空に枝突っぱねる冬景色
赤ん坊のおしゃぶりの指春隣
花の山花見の横浜異人さん
日光写真竹馬の友は漁師の子
またしても雨降り出しぬ小晦日
花舗を過ぐ足許桜草明り
松とれて本買ひにゆく日本橋
振り返る袂あり銀座辻
袂袂見て振り返る
松過ぎの銀座すいすい歩きけり
銀座より電波を飛ばす袂
小寒の川風受けて日本橋
壁に杖ずらり立てかけ初句会

黒帝のつまみ食ひせし柿の蒂
停年へ一歩近づく年の関
寢床にて大きく伸びすおらが春
妻
手が空けば白河夜船君が春
もう起きて台所に立つ年の朝
先生に聞こえるやうに耳の春
一筋のホ旬に繋がる自他の春
三の朝いちにつきさんと床を起つ
弟と四方山話弟月（おとごづき）
連呼して売れぬ商品暮古月
これと云ふ力士ゐなくて初角力
初国旗いつも立つ路地垣間見て
三極の密々のこゑ日溜りに
とてつもなき冬日まみれの大公孫樹
冬鴟の角つき合はず啼き方も
冬鴟の身につまされる啼き方ぞ
ごり押し北風に公孫樹の丸裸
日まみれに大公孫樹枯れ愉しめり
白梅の真正面はこの辺り
枝影を潜りて園の梅見客
大楠の懐に鶉遊ばせて
じゃんじゃん降る霰の昼となりにけり
降り出せる霰うらめし丸の内
老眼の度の進みゐる年の内
葛生線すたとんすたとん枯野ゆく
曲り角風をくらひて大噓
梅林のあればつと入りついで出で
梅林の荅ばかりの素っ気なし
乃木旧居梅はまだまだ固荅
震るるも家路を辿る頃は雨
手の先が痺れ家路の夜の霰
霰から雨に転ずる夜の家路
大楠の青葉漲る冬の雨
山菜萸の固き荅に雨白し
一月の微光湛ふる水と天
愛染の愛憎一如寒明くる
枯れ煤け睥睨公孫樹ふてぶてし
柿の蒂みたいなやうな梢（うれ）の鳥

さむいよと只啼くばかり寒雀
霽にも雪にもならず只の雨
暮るる木へあとからあとから寒すずめ
鳥の名を知らねば冬の鳥で通す
やっかいな凶鑑で探す冬の鳥
くろぐろと寒暮の雀枝走り
大楯の肌のざらつく寒明けぬ
歯切れよくものは云ふべし寒雀
枝擦ってふくら雀の翔び発てり
よき齢を召され天覧初角力
やがて来る夕闇そこに寒雀
舌にしみとほる夕凍み軒雀
針状の舌おもふべし寒雀
寒雀降り立つ枝の上枝にも
寒雀こゑの徹れば齟齬なからむ
寒雀一徹者のこゑ通す
あれあれで通づる夫婦けんちん汁
藪入りと呟いてさあどうなんだ
点滴の壇は勲章木の葉髪
寒シの採尿咄嗟に出たりするもんか
外来のわが名呼ばるる春隣
採血の寒シのゴム管（くだ）キリキリ結ぶ
着膨れて只只じつと診察待つ
薬買うて一息つける暖房棟
手袋をしてゐてうっかり落とし物
手袋の役っ立たずを剥ぎ署名
湯豆腐の湯気にまぶせる顔の蠹（しみ）
落葉一枚頭に載せてちちんぷい
昼飯の蕎麦屋に狐狸顔
このシチューかちかち山の狸いろ
向ひの客狐饅飴に狐顔
狐いろそば焼酎の広告ビラ

● HAIKU20002sono1

大寒の青木刃明りせるごとし
霜の道叩けば霜と土の音
熊さんのごとく着込みて現るる
大寒の岩盤削り山の水
切通し落葉朽葉を踏み付けに
鎌倉の鬼門の神に餅と御饌
枯蔓の端にぼつちり烏瓜
切通し大寒の土零す音
切通し岩しぼる水凍りつき
林間の裏白に日のほっかりと
鎌倉へ齒朶生ひ茂る切通し
鎌倉覇府齒朶を遣して滅びけり
熊野神社
鎌倉のうしとら鬼門齒朶茂る
参道の石畳霜張りつめて
枯木影岩場の道に切通し
山水の音滑らかに崖氷柱
崖つらら二段その上にもう二段
崖つららざつと数えてさあ何本
さあ何本ここから見ゆる崖つらら
岩肌も氷柱のいろも象牙色
三極と見しがまさしくさうであり
常緑樹影を落せり水面鏡
もう戻る三極の寺辞しにけり
霜柱まだまだしつかりしてをりぬ
初空にそつぽを向ける柿の蒂
もう一本引きずられ落つ崖つらら
靴の泥削ぎ落としけり梅の下
五山第一位万両の似合ふ寺
梅つぼむ口もつむぐにしくはなし
巖山の涎然たる崖つらら
柿枯れてすつからかんとなりにけり
庭石のまるまる梅は固荅
窪みの落葉踏めば窪みの音のせり
梅林に剪定音の徹る昼
梅林に缺との鋸の剪定音
下山道枯木の日いろ頼みけり
枯蔓の薦（こも）引つ被り一立木

赤き芽と赤き小枝の一冬木
雑木山枯葉の精に憑かれけり
柿の蒂カアの一々声凍みにけり
山鳩のごとく身を揉み寒ン払ふ
切通し降りてゆるゆる初音聞く
靴紐のこんなどころにいのこずち
話しつつ上目使ひに春の鶯
梅林の剪定済めば鴉が来
訥弁のもくれんの芽の談話中
とつスキの梅の一輪嗅ぎぬたり
ハイキング煤け木五倍子の芽に出会ふ
ざうざうと何の枯蔓滝なせり
両の手にけふ大寒の顔揉みて
ポケットに手押し込んで寒ンの街
はりはりと顔凍りつく出勤路
鼻莫迦になるまで寒ンの出勤路
大寒の暁をゆく顔つんつる
大寒の顔を進める暁の街
大寒の肩をすぼめて満月下
淡々とその位置変へて春の雲
のんのんと海上に出る春の雲
鈴懸に木枯し小僧勘三郎
そそけ立つ公孫樹並木へ空つ風
大寒の満月見ゆる路地選りぬ
大寒の歩みがてらの満月光
大寒の満月覗く家間（あわひ）
鈴懸の枯木のパントマイムかな
年賀状ああこの人のこの癖字
天帝の一々吹き春の雲飛ばす
大寒の酔のしむ牡蠣を丸呑みに
大寒の楠の葉に目を洗はるる
早梅に上目使ひの通行者
鴨みれば首をすくめて梅が下
あち見こち見梅が上枝の鴨の嘴（くち）
ふくらんで風除く鴨の背格好
大寒のこむら返りに利く菓
大寒の底光りせる檜青菓
梅林の早咲きの梅これつたけ
梅弾け音無き音を聞くごとし

冬將軍直伝の檄飛しけり
三一（さんびん）の戀猫弥太郎徘徊す
葭切の直談判が続きをり
大寒の大楯の腰坐りけり
探梅と云へどいささか早過ぎし
寒梅の探しあてたる一二輪
振り向いて吾（あ）がをり鴨の大慌て
極寒のこくんと一つ醤油の音
赤く寒し醤油と塩の壘の蓋
寒明けの底光りせる青木の葉
俳縁のいつとはなしに切れて寒ン
火の用心命用心寒最中
寒中見舞子息に先立たれたる人に
大寒のとりわけ蕎麦を啜る音
大寒の連れと飛び込む蕎麦屋かな
いっぽんの句業の道の余寒星
東京に勤めて三十余年の冬
一々吹き風の風に揺らぎぬ余寒星
一枝の空へ突き出す余寒かな
出勤の一人一人の余寒顔
庭土を踏めば余寒の音還る
干柿を指が覚えてをりにけり
干柿に蒂あり蒂に指当てて
干柿喰ふ作法あつてもよかりけり
好物の内の干柿それが出て
お餅喰ふごとく干柿喰ふなかれ
トンカツのつまのキャベツの深みどり
鴨の胸白日差し乏しくなりにけり
鴨を見てあとは日暮れを待つばかり
水脈を曳き鴨一斉に向かふさき
寒雀トコトコトツト石畳
水脈を曳く鴨は樟脳舟に似て
寒鴉肩を怒らせ野邊歩き
鷺鷥と目を水平に使ひけり
古杭の瘦せに瘦せたり鴨のこゑ
古杭に鴨の水輪の及びけり
瘦せつ杭一つあなたに浮寝鳥
寒々と翡翠水面見つめをり
幹振れなかなか咲かぬ頑固梅

先つぽ梅の苔は走りけり
ほうほうと梅の苔を見て廻る
二粒づつはた三粒づつ梅蕾む
梅が枝の苔の付き方三通りより
ポケットの中の拳も氷点下
大寒の出されし酢牡蛎大きいぞ
塗箸が滑るの牡蠣が滑るのか
大寒のとろとろ酢牡蛎掬ひ上げ
どの件も些事と切り捨て冬籠
見極めて些事やり過ごす年の暮
はげちよろの蜆の尻のすまし汁
つまめば逃ぐる酢牡蛎に酔ひの箸加減
酢牡蛎呑むつるんと喉が鳴りにけり
輪島塗箸でつまめば牡蠣逃げて
着膨れてじつと一日家の中

ほうたるの自家発電の灯の暗し
不見転（みずてん）の螢も中にありぬべし
土筆土筆ガウディーの塔土筆
ほたるにも戀の鞘当てありぬべし
螢は星一億光年前の星

寒晴れの風削ぎ落す雑木の枝
寒晴れや猫のごとくに日向に居
寒晴れの鴉と蒲団ベランダに
寒晴れに鴉もああと諾ひて
寒晴れの飛行物体ジュラルミン
心臓が縮こむけさは寒いやえ
風邪引いて床に打ち臥す図は平日
風邪の身の海月さながら廁まで
腰つきの何處かふはふは風邪引くか
風邪の身のどれもガタガタ蝶番
新宿の方節分の空茜
節分の発止と豆も掛声も
節分の空降り鳩のくりくり眼
僧正のそらそらそらと豆撒く手
豆撒きや僧正の袈裟翻し
裏白の谷戸の細道一の午
午まつり焚火の灰も宙を舞ひ
初午の鈴陰々と響きをり
甘酒に氏子ら温む午まつり
閑伽桶に落葉一枚年尾墓所
藪椿この道降りれば虚子の墓所
椿の間リスが覗いて引つ込みぬ
太郎杉古色蒼然一の午
初午の焚火何やら燻しけり
祠まで百段昇り午まつり
杉叢の奥に山堂一の午
いっぽんの年尾の墓所の枯くわりん
化粧坂風吹くばかり枯木季（どき）
立子にも同じく供華の寒黄菊
その奥の祠にも揚げ一の午
立子にも虚子にも手向け寒黄菊
櫟林寒晴れの日が透りけり
おそらくは寒菊の黄や虚子の供華
三宝の中ににんじん午まつり
一礼後お直り下さい午まつり
若宮の社殿に映ゆる薄紅梅

袋小路三極のよく匂ふ家
曇日の旧家の三極花明り
寿福寺や寿の字寿の字に梅の花
梅を描くコンテのタツチ荒削り
空模様何とかもちぬ一の午
天気予報かんばしからぬ探梅行
鯛一尾三宝に載せ午まつり
天気予報外れて雨の白木蓮
午まつり祝詞かしこみかしこみと
しづしづと巫女神楽舞ふ午まつり
八幡宮宮司上座に午まつり
玉ぐしを我等も捧ぐ午まつり
一の午雨具が役に立ちにけり
銭洗弁財天道笹子聞く
三寒の黒竹粹な一商家
山堂に氏子畏み午祭
その中に新（さら）の鳥居も一の午
吾が身幟に染まらむばかり午祭り
甘酒の匂ひが風に午まつり
午まつり氏子ら煎餅座布団に
車窓見て二言三言日脚伸ぶ
寒晴れの鼻梁に海の風少し
花桃は田舎娘の器量佳し
指さして話途中の花ミモザ
紅梅の家のとびとび佐助町
紅梅のいろの飛びたる訪問着
椀の中おやおや浅蜷の隠れ蟹
行き合ひて横柄な蟹其処退かず
観梅に誘ひし手前ばつ悪し
雛の日のいちごが雛のケーキかな
長谷寺の階（きざはし）のこと牡丹見つつ
繁殖栽培し難い
中国牡丹豆緑（とうりよく）当り年の花
庭石の突こつ姚黄（ようこう）牡丹咲く
趙粉（ちようふん）は趙飛の國の牡丹の名
根回りの土のこんもり寒牡丹
雪白の匂ひ秘めたる冬牡丹

ぼうたんの珠ぼつてりと日表に
寒咲きの一つ性よき緋の牡丹
赤手袋取りて一札一の午

其上（かみ）は釣り針なども針供養
貴女まあお変わり無くて針納め

針納む婆の手つきも慎ましく
行き合ふて話が弾む針供養

つつみ紙楚々と開きて針納め
針納む美風普く世に傳はり

針入れも共に納めて針供養
婆ちゃんの可愛い眼鏡針供養

数珠売りて仲見世通り日脚伸ぶ
連れ立ちてお針子仲間針供養

一斉に鳩の翔ぶそら春シヨール
雷おこし花桃いろも打ち交え

雷門潜り四温の中国語
母

この道で生活（たつき）を立てし針供養
下萌えのいろの待ち針針祭

針まつり母にも嘗て針の日々
紅絹（もみ）いろに浅草の空針納め

まなうらにミシン踏む母針納め
藜葺く堂浅草寺草創圖

針納む日とや淡島明神へ
がむしやらにミシン踏む母針納め

連れ立ちて仲見世をゆく春シヨール
鼻の上にちよこんと眼鏡針供養

今日一日針を休めて淡島さま
凧の夜のシチューにワインはロゼ

針納む人のおもひもそれぞれに
青空に落葉一枚吸はれけり

寒四郎相模一円襲ひけり

春立つとおもふ日差しに面当て
掌に日差しを載せぬ春立つ日

ふきのたう君住む家は丘の上
血色よき児童が通る春日中

立春の板の間にさす白日差

君呉るるは丘のずんぐりふきのたう
馬刀突きといふ捕物に似たるもの
鳩の眼のくりくりけふは春立つ日

こめかみにひたと二月の白日差
年の豆日差しに紛れてしまひけり
おもひは遙か雛購ひし時処

こゑ挙り芝増上寺節分会
追儼寺こゑの挙げば足逸り

大銀杏隆と曙豆を撒く
鬼やらひ凜々しき鬚の武蔵丸

楼門の朱のいきいきと追儼寺
楼門の奥よりこゑす追儼寺

大覺人は豆粒追儼寺
豆撒きの淡谷のり子のこゑの張り

別嬪の肱を覗かせ豆を撒く
豆撒のこゑ凜と張り紅一点

首筋のあたりがすつと余寒空
道すがらコツンと生る梅一句

二月始思ひ立つたる大仕事
緑萼梅鋭角に影投げ出せり

ふむふむと二月の庭を往き来せり
杭打ちて二月の蚯蚓驚かす

玻璃越しに雀を覗く寒がり屋
立春のリビングルームに鳥影さす

蟻穴を出でざる庭の土眺め
立春の日に当たりたく庭に出づ

寒晴れの隣家に来意告げゐたる
粗き日の小枝に注ぐ一の午

乾燥芋焙り上手よ婆ちゃん子
さんざんな日の食卓にほうれん草

畳から板戸に移る冬日差
今年停年

ふきのたう自適の日々が待たれけり
野暮ったき枇杷の咲き出す頃もよき

黙り来て黙り立去る冬の鴉
冬鶯吸ひ付くやうに梅が枝へ

年金の暮しそろそろ鳥雲に
年金の本読み始む春立つ日

鳥雲に年金のこと生活（たつき）のこと

尾の長きこの鳥去れば寒暮の木
ばうばうの立木に凧やつて来た
鈴懸の意地といふ他なき木瘤
風邪三度引きしその冬終らむと
身震ひの果して風邪の引き始め
ふきのたう月例会に持ち込めり
浅春の櫂に鶉のむかう向き
心音の高鳴るごとく暖房音
干柿のちようど五つ目この種は
干柿の蒂の寒山種の拾得
紅梅のこれといふ彩無く窶れ
洋服の裁断のおと雛罌粟に
立春の肉屋の前を通りけり
干柿のこの薄つべらな種五つ
恋猫のそれかあらぬか忍び脚
酷寒に打たれて覺めぬ梅の性（しよう）
梅見ての余生などとはとんでもない
旧軍港浮寝の鳥もなかりけり
人を見て寄り来る鴨の日和顔
鎌倉の春めく小路見て歩かん
梅散つてよしと云はぬにもう散りて
斉昭の戦に備ふ梅ぞこれ
停年がもう目の前に水温む
鉢小物持出し春の土いじり
六十年寝起きの一間初明り
水温む池に棒切れ浮いてをり
水温む水辺に顔を持ってゆく
砂場の子遠く見守る四温の目
午まつり目指せる畦の踏み心地
春めくと家路半ばにして思ふ
ふむふむと云ひつつ巡る牡丹の芽
雑木の芽やうやう陽気よくなりて
暖くなりぬ砂場に雑木影
すってんと転んで掴む春の土
暖くなりて砂場の砂いじり

蜻蛉ゆく映画日和の背を見せて
三本立て映画観て出づ真炎天
映画館出ても風死す街の中

井守の腹それから戦後五十年
水団の戦中派なること自認せり
諸畑で機銃掃射に遭ふ母の日

序幕又終幕臚職を引く
蝸牛化シテ蛞蝓（カツユ）トナラン今日カ
ラハ
蝌蚪に見る定年といふピリオッド

あほむくもうつむくもよし寒椿
痛み分けてふ語がふつと寒椿
白加賀の枝を昇り詰む蒼どち
えっへんと枯れ鈴懸の胸を張る
苗札もびしよびしよに水遣りにけり
梅が枝の間に踊れる鳥の翳
浜っ子のジーンズ姿日脚伸び
ひよんの木の虫瘤に寒明けらし
虫瘤のあをあと寒極まれり
粗櫂の葉に吹きつゝのる涅槃西風
白梅のちらほら咲きと薙めき咲き
日の差せば浮き上がり来る花三椶
皂角子の赤み帯ぶ棘寒明けぬ
ハリギリの針濡らす雨寒ゆるぶ
木馬道煤け木五倍子の燻りやう
拾ふ掌も梅檀の実もしなびるて
花三椶花眼は進むに任せたり
御所柿のもうすぐ暮るる葍の数
枝先に葍の賑はふ次郎柿
こんにやく村空を飾りて柿の葍
蓬菜といふ梅ありて夢うつつ
梅園に故郷の錦てふ梅も
瞬きてダンコウバイの黄の小花
土佐水木枝は和臘の光ゲ持ちて
日向水木朝日に蒼迸る
バラ苑のバラ大胆に剪定す
炬燵で読むげんこつやまのためきさん
虫捕らぬウツボカズラは役立ず
枯れてをりウツボカズラの壺半分
やみくもに連翹の芽をつけたがる
チューリップの芽立ち轉り初むやうに
枝先に合歓の枯れ莢一二三(ひいふうみい)
金縷梅の目出度く中華菓子の彩
枯れざまもへっぴり腰の柿古木
しんと内苑しんしんと白椿
豆撒きの赤鬼さんと青鬼くん
心臓の検査の梯子二月盡
金縷梅のきみしぐれ彩眩しめり

接骨木の訥弁聞いてやらんかな
うぐひす餅それだと話促せり
烈風のなか金縷梅に目を張りぬ
紅梅の紅を力に坂上る
ぜいぜいと坂よじ来れば花木五倍子
棒切れをずると滑り蛸蚪の紐
二分咲きの梅と聞きしが嘘ぼつかり
パイヤの幹むつちりと月明り
マンゴーのむんむん熟るる星月夜
寒晴れに顔晒しゆく出勤路
波打って大き涅槃図御本堂
枝先に枯葉くると山日和
つくねんと柿の木いつぼん枯月夜
青空のまま昏れ柿の葍月夜
棕のごと患者並びて煙草すふ
啓蟄の耳掻き出して耳掃除
誼みとてほうれんそうをまけ呉れぬ
いっぼんの心に留めぬ夕紅梅
三椶の俯くほとりしんとせり
鳥も引きぽつねんとある夕紅梅
ひととほり梅林を見て引き返す
独語癖いつよりつきぬ紫木蓮
停年を今からおもふ日の永き
やにはに咲く杏に桃も負けてゐず
親指を入るる灯まみれ伊予柑に
春宵の金具古びしシャンデリア
強引に香を放ちけり沈丁花
年金の本など読んで目借り時
仕事かたして春菊のごまよごし

● HAIKU20003sono2

山菜黄の弾けてぼっと夕日中
辛夷花芽陸続として天に入る
日和よく妻を誘ふて草摘みに
もめごととも一段落や桃の花
蓬摘日和と妻の言ひ出せば
観劇の出鼻挫かる寒戻り
山菜黄のこの花咲けば春一気
梅汚れ番ひの目白来ずなりぬ
嘴の如き木の芽の冴返る
花付けてとつても寒き日の山菜黄
亀の子の首すっこめるごと家居
外出を思ひとどまる春一番
白神山地
もみずるなか命引継ぐ山毛櫨木の芽
越冬の山々山毛櫨の落葉着て
繚乱の時を惜しみて山毛櫨黄葉
夏旺ん山毛櫨受けとむる雨の嵩
ザンザ降り雨を溜め込む山毛櫨根方
水活きて五月雨月の山毛櫨林
まんまるく山毛櫨の回りの雪解穴
夏山は巨き水瓶山毛櫨の森
夏暁の靄立ち籠めて山毛櫨の森
山の神餅搗く音に耳かしぬ
一本の山毛櫨の実二萬猿漁る
若葉せる山にしみこむ雨と山毛櫨
夏の雨土中はしれり山毛櫨の山
水音の何處か夏暁の山毛櫨林
鮫鯨の毀れし貌を繕はず
黒々とバナナの打ち身更くる灯に
寒がりには内弁慶に似て家居
赤海鞘に何時よりつきし独語癖
海鞘食ふは自己満足に似て今宵
けふ一日如何に過さん山菜黄
鎌倉を歩いて疲る春一ア日
野遊びのおむすびの海苔パリリツと
死んでゆく身故に花鳥よ風月よ
やどかりの新しがり屋宿替えぬ
山菜黄差しくる雨に滋味を得し

春の蠅温とき石と知つてをり
土いじりすすつと抜けてはこべの根
世話なしの都忘れの屯ろ咲き
月あるも寒さしぶとき戻り道
幼子に董のいろを言はせをり
乳母車など買うて遣り春隣
くるぶしのうすむらさきにかたばみ咲く
旭の黄み山菜黄の黄み睦まじや
もうそろそろ芽の出る頃と庭に佇つ
山菜黄の黄み朝が来て日が昇る
土いじり終り四温の腰伸ばす
冬夕焼会社勤めも大詰めに
焼きたての麺麴は手のいろ復活祭
立読みの字が立ち上がる目借時
クロツカスぐらと地表を吹ける風
クロツカス日がな開閉繰り返し
轉の何処と見れば樟懷
彼岸西欠航是非もなかりけり
唐突に立出はくれむ吹かる中
紙包桃の荅が覗きをり
御神火と逆巻く風と椿の島
ジェルソミナ白昼の道やつて来ぬ
八景の一景望む崖椿
辛夷吹き天地の間を抜ける風
花ミモザ風泳がしてあたりけり
花ミモザ黄み搔き立てて咲けるなり
彼岸荒海道に松傾きて
船で来て安房の花菜に染まらんと
豆の花和気藹々の風吹けり
岬椿樹勢いよいよ旺んなり
茅ヶ崎 氷室椿庭園
竹筒に一輪挿しの白椿
老画伯然たる人の椿見て
洋椿和椿椿園巡る
妙連寺椿といふは燭のいろ
枝々に松葉の懸る園椿
荅勝ち絞乙女といふ椿
鳥ごゑのときに絶えたり椿園

藪椿無頼の日々をかこちけり
松ぼくりちよんと立つやつ転けるやつ
早咲きの椿椿と口伝え
さくら草微風の生まれ継げるなり
毛糸帽椿の花粉付けて来し
日月の赤赤椿白椿
喋々と鳥語椿は林なす
太郎冠者椿は頗る賑やかに
名は体を表す椿の名は聚楽
粹な名を付けたものだよ緋の司
拔筆てふ椿画ごころ誘ひけり

蠅の子のさらはれまじと大風に
蟻穴を出づ大風の吹ける中
春一が日がな木の家鳴らしけり
山茱萸咲き贗金造り流行る世に
大風の磨ける梢彼岸過
通りがかりの人掴まえて彼岸婆
大風の家並みを鳴らす彼岸入り
亀ヶ谷扇ヶ谷の木五倍子咲く
花見酒お国言葉の次々出で
この沖で釣り来し俺(わし)の鯉じやき

郡上八幡

鶺鴒が釣れた釣れたと尾を振れり
鳶の眼冴ゆ川の郡上の中空に
岩陰に潜むあまごを釣り上げぬ
水舟に溢るる春の水使ふ
釣人にあまごの育つ川の中
あまご釣終の一人の川虫採
冴え冴えとゴム長靴の川虫採

面目を施すごとく花菜へ陽
いづれが先花菜陰ると日陰ると
スケッチす日ざし射し込む花菜畑
花菜道声掛け合ふてすれ違ふ
初蝶のいとたをやかに舞ひ出しぬ
日にポンと弾けさうなる桃蕾
道草をしてゐる其処に初蝶来

春樺日まみれとなり寛げり
春樺ながむるゆとり生れけり
日に潤ふ枝しなやかに春樺
小米桜供えて佛喜ばす
靴先で朴の落葉を返すべく
変哲なき山路木五倍子の花に逢ふ
国道に突き出す木五倍子駿河晴れ
盛り上がることはくれむに及ばざる
梟の首よく回る枯木どき
摩訶不思議顔してバクの昼寝覚
南風に虎威風堂々たる歩み
手長猿手が伸びだして一万年
オランウータン春土に体毛擦り歩く
鴉の子あ音続けて練習す

はつらつと朝の気に触れ白木蓮
街空の雲吹く風もめつきり春
寒雀シャキツと躰締まる朝
大寒の肩すぼめゆく満月下
はくれむに雨降りかかる麓村
春めくと探りを入るごとき日差し
飄々とはくれむ吹かれある高み
青空に何語り合ふ白木蓮
快活に道問ふ青年はくれむ樹下
によきによきと繰り出す枝に春めく陽
白木蓮の幹烈風に一揺らぎ
田端義男

うねり来る波の背に背に春かもめ
春鷗どうせ俺らは玄界灘の
むらむらと狂気擡ぐる花菜照
彼岸西びゅうびゅうびゅうと吹きにけり
突き出して喇叭水仙黄のラッパ
太陽と競ひ菜の花照り負けず
門徒衆支垂桜の輪の中へ
青くさき莢ゑんどうの炒めもの
南無花鳥詠えば浄土に到ると知れ
花に来る風待ちをれば南より
花吹かれ色風の綾尽しけり
うるうると白木蓮容れて明くる空

杏咲く情に溺るるごとくなり
春櫻ゆとりをもつて眺めけり
朝餉の卓飾る油菜二三本
にこにこと縮緬皺の花菜の葉
彼岸過ぐと云へどぬくきの今一つ
北佐久の風吹き絞る鯉幟
白木蓮一日風の吹きまくり
烈風に庭山茱萸の蕾張る
街路樹の整う舗道南風抜け
花は波湧き立つ風にうねり初め
増上寺総門前の植木市
山茱萸の色を引き継ぎ土佐水木
啓蟄の鳶なまなまと岬道
とある日の桜は鬱をもたらしぬ
黒人らバーベキューして花の下
潮臭き風通るなり基地桜
鳥雲に旗艦三笠に佇めば
真っ直ぐにGIの来る花の道
さくら満つ色を返して海の風
花愛づる背に海東郷元帥像
砲門のよきによき横須賀鳥曇り
花につぶやく皇國ノ興廢此ノ一線ニ在リと
まだまだと杏頑張る側から散る
花散らす風に桜の言伝てす
杏は桃に一足先にと云ふて散る
連翹も微笑年金にも課税
貧相な辛夷日が落ち風が出て
餡蜜に遠出疲れの腰癒す
素性良き木の花黒文字うち仰ぎ

連翹越し近道訪ねられてをり
つかぬことうかがひますがと連翹越し
点り初め花懐に灯の透る
夜櫻の房々にある浮遊感
夜桜もぼんぼりの灯もほたほたと
夜気幽気大島桜まとひけり
宵桜雪洞浮足立ちにけり
初桜たゆたふ朝の風ありて
とりかわす鳥語密々花懐
ふむふむと通りすがりの桜見て
夜桜のぼんぼり尽きるところまで
うつすらと芽吹く山見て花眼とは
一本の遠ちの桜へ鴉翔ぶ
初桜風来れば又そはそはと
つと見上げ職人町の初桜
とつくりと芽吹く山見てかはたれどき
糸桜萬の荅に紅溜めて
つくづくとさくら花満ち日に重る
咲き初めの心に散らす花吹雪
花満つる日表にして風表
日永亀首伸ばす方何ぞある
こんなにも亀があるとは日永池
泳ぎ来る亀を亀見て日の永し
腕によりかけてこれより糸桜
水温み一日亀の甲羅干し
帰るさも日永の亀の甲羅干し
水上の桜の一枝風誘ふ
親分の貫禄もちて浦島草
山道のここにどっこい浦島草
咲く頃と思ふて来れば壺すみれ
淡淡と日の差し込める壺すみれ
夕桜すつと色調落しけり
同経路とりて董の咲く山路
年々にたちつぼすみれ淡きかな
やぶれ傘よるぼひ立つに間に合わず
山道に六方踏めるやぶれ傘
花あればその下に入る鳥と人
山芽吹き白みのかかるうすみどり

林間に仲間を殖やす二輪草
やぶれ傘傘さしきればつまらなき
子のごゑが遠ちより拳がり蓬摘
花蘇枋立派になりぬ旦那寺
初桜仰げる顔が佳かりけり
夕暮れとおもふところに一落花
山歩きたちつぼすみれに一息入れ
ぺんぺん草よくよく見れば面白き
芽吹くなら櫛パッとパッと
烈風に丁々発止崖桜
階に池に落花の選り好み
やぶれ傘臺が立つとはこんなもの
初桜鴉の濡れ羽脇抜けて
花蘇枋ぶつぶつ云ふても始まらぬ
土筆ぼかんとしてゐるうちに命日過ぐ
散り了へて又の愉しみ濠桜
種跳んで隣の墓にも土筆生ふ
おとなしくはた遅しく花の宴
風はたと絶えし桜の日に重る
下枝を揺らしにかかる花の風
山桜かはたれどきの光溜め
腰に根が生えて眺むる谿桜
この桜がよしと根方に腰下ろす
葉の上は見通しよくて二輪草
踏青の三時となれば風冷え来
山桜おはるいつしか葉隠りに
芽吹くなら芽吹くと櫛はつきりせい
幹くすみ芽吹き遅れの大櫛
雲間より久米の仙人掌を吹く
春草の尖見つめては寛げる
容あるものを象り飛花落花
芽吹き山花も櫛も朦朧と
囀りの相も変わらず単調子
木を描くに幹から描きてさくら時
仁王門飛花吹き抜けてゆきにけり
僕のザリガニ君のザリガニバケツの底
たんぼぼに屈むも年の功の順
我を呼ぶ声ありたんぼぼ咲ける道
やつこらと云ひ坐すからすのゑんどうに

花の風通ふこの道ゆくとせり
下枝より上枝に渡る花の風
山桜花を透く日と返す日と
芽吹く山見てみて画法朦朧体
ネクタイをして花見とは上野山
いちめんのからすのゑんどうとくと見ん
道の辺に引つ込み思案のたんぽぽも

年金の試算始めり水温む
潮吹の数が物云ふ大干潟
この人の斯(こ)うゆう句が好きさくら時
尿に立つ廊下ひたひたさくら冷

つくし見て陸放翁の詩(うた)の数
あの頃の松葉牡丹の咲ける家
見目眉根展き名うての海棠に
雨の日は雨のおもひに桜餅
風光り出す頃ほひの草の尖
雨の日は雨の紫蘭を玻璃越しに
雨近き寺の海棠覗き過ぐ
翅ひろぐうすばかげろうガレの壺
春燈(しゅんとう)と読み直されて披講の
座

小春日に犀の短軀を横たへぬ
味はふてみたき紀州の花菜漬
雑俳と諸作っても作っても
相模野の青き踏み来て手ぶらかな
亀鳴くを聴くとておかしからぬ齡
ためらひつやらないである山椒魚
音もなく雨吸ふ雀がくれかな
駒返る草定年を目の前に
兄事せる人さしおいて葱坊主
合いの手に海風浜の三味線草
正直に黒文字の花咲きにけり
句を忘れ人を忘るる蘇枋どき
歩く会雨天決行チューリップ
街路樹の鈴懸が咲き街整ふ
簡単に一句の成れる山桜
掴みたくなるよな飛花がもう一片
花見どきさて近辺の何處のせう

春整ふ街路樹沿ひに九段まで
片手出し掴みそこねし落花かな
金澤文庫池のほとりの桜見に
黒文字の花に朝日の滑り込む
走り根にうち当りたる飛花一つ
花過ぎて庭の手入れに精出せり
堀端の桜あら散ることよ
チューリップの唄繰返す出だしのみ
思ひつくまゝに桜の城の道
一向に櫻芽吹ける気配なし
葉のぐんと花了ふ雨に葉のぐんと
漫然と櫻芽吹き刻迎え
東京に勤めて五十路蘇枋どき
仏壇に毎日あげて小米花
山吹の茎を除いてみな枯るゝ
庭先に郁子の花咲き出さか
興ずるやわけても幹より花噴く木
水温むきのふと同じ石に亀
飛花一閃平らな土を好みけり
花冷えの風わたりくるお堀端
出来過ぎの鱒てふ文字鱒季
芍薬の匂ひ詩囊を刺激せり
水靄の諏訪の下諏訪へは祭
御忌御忌と云ひて桜の鳥啼けり
否定語を使ひ損ねて亀鳴けり
掘割の花へ吹き上ぐ風上上
めいっばい咲く花濠の水まんまん
真っ白な花に群がる風一目
満開の心を一に濠桜
一滴の雨にも遇はず初ざくら
なかなかの櫻と幹に手を掛けて
あまりにも人間臭きくわりんの實
雨風に動ぜぬ花蘇鉄とはなれり
八重櫻ゆさぶつて地震ありにけり
鳴神の海渡り初む走り水

● HAIKU20005sono1

みちのくへ花追ひかける旅をして
花の旅一つ定年前にして
旅はまだ続く日永の烏龍茶
福島は桃桃の花霞
落花ひとひら二本松少年隊
さくらさくら小学校のさくら咲く
苗代の秋田こまちに水鏡
代田中すとんとゆくこまち号
こまち号すすつと発車鳥雲に
秋田より花の都へこまち号
山中に湧き継げる温泉(ゆ)と遅桜
角館
角館駅にいつぽん桜の木
角館郵便局の糸桜
花辛夷飛び込んでくる田沢線
いぶりがっこバリバリやつて柚昼餉
花どき食す稲庭うどん七代目
武家屋敷
北国の餅肌いろのさくら咲く
飛花当る武者窓付の下見塀
角館目抜き通りの糸桜
糸ざくら越しに並みゐる武家屋敷
青柳家
医薬門潜り出づれば糸桜
青柳家武器蔵脇のクマガイソウ
亀型の花冷えどきの火薬入
火縄銃七丁花どき武器蔵に
秋田蘭画発祥の地のクマガイソウ
春日受け板谷楓の細工物
武家屋敷飛花の舞い込む廻り縁
「解体新書」挿絵画家小野田直武
鳥雲に直武描きし人體圖
この裏に直武生家紅支垂
秋田藩支藩の花の城下町
花季のお薄一服岩崎家
武家町の曲り角にも糸桜
秋田藩支藩商家の花小振り
ほくり咲き秋田支藩の武家屋敷

つつつとしだれ桜の花昇る
つと消えてつと現るしだれ桜花
花びらのつういつういと糸桜
ほつほつと云ひて仰げる糸桜
家桜こまごま咲いて商人町
餅菓子
雲平を一つ買ひ足し花の旅
まんずまんず寄ってたんせと多羅の芽売る
板塀を透いて連翹明りせり
黒塀にするりするりと糸桜
ひゅうと手が伸びて編み込む通草蔓
もくもくと花冷えどきの樺細工
落雁売茶つこさのんでいけといふ

絵木内川
絵木内川高堤いま花堤
花堤万の薙を敷き詰めて
いぶりがっこキザミがっこに花の昼
お花見の陣取りをして高堤
貫ける桜並木と奔流と
堤より奔流を見てさくら時
風強く花まだ早き川堤
川沿ひにセスナ機飛んで花見時
木の國の地酒をかうて花見酒
田沢湖
透きとほる雨が降るなり遠辛夷
岩手路の露の姑ようこそと
岩手路の山峡に入り辛夷見ゆ
岩手路のげんげ田は未だ雪の下
林間を翔ぶ一鳥と雪解風
水芭蕉讚歌唄うて湧水過ぐ
水芭蕉水に萎ゆ花横たへて
せせらぎに顔覗かせてふきのたう
ぼつてりと日を受く湖面つくしんぼ
乳頭温泉
山毛櫨描くコンテさくさく雪間どき

ふきのたう首をもたぐる落葉沢
芽吹きまだうんともすんとも湯治宿
こんもりと山の湯宿の煤け雪
雪割れの雪を山毛櫨の根受け止めて
山毛櫨林水駆け抜けて雪解急
道しるべ首覗かせて雪間道

林間の雪間の空に山毛櫨赤芽

雪のひま無念無想の山毛櫨一樹

露天風呂雪間の山毛櫨に見下ろされ

湯壺の上赤らみはじむ樺の芽

山毛櫨芽吹く山の湯宿は湯を引きて

迎え呉れ宿の廻りのふきのたう

ふきのたうちらほら山毛櫨の雪間谿

一ア屯又一ア屯水芭蕉

水皺の其処此処頭てる水芭蕉

せせらぎにもう目覚めぬる水芭蕉

雪囲ひ取れし許りの宿に泊つ

人間にくびるるところ雪間の温泉（ゆ）

ふきのたう山毛櫨と問答してをりぬ

火山弾散らばる隙にふきのたう

ふきのたう雪間に長けて一温泉宿

青天へ雪を撥ね除け山毛櫨一枝

山毛櫨林眼下に見据え春スキー

日暮れ道雪解明りにふきのたう

山蛙聞き貽蕩として長湯

玲瓏と山毛櫨の根方の水芭蕉

げっそりと山毛櫨の根方の斑雪

山毛櫨林の秘蔵っ子なるよ水芭蕉

石割桜

岩手路の石割桜見てゆかん

ほこほこと田起す方に岩木山

岩木山旭を受けてりんご色

石割のえらい桜を一目見ん

立ち寄りて見頃の石割桜の辺

朝の気の漲る石割桜是

枝張りも根張りも石割大桜

朝は冷ゆ岩に根下ろす大桜

石割桜けふは見えざる岩木山
石割桜石に籠れる石の音
あれまあと石ぶち割って咲く桜
ものの芽も盛岡弁ももそもそと
耕しの空の展けて岩木山

遠野

呆けをる土筆と待てる釜石線

ごとごととん遅日の釜石線に乗り

陽炎を搔き分け搔き分け釜石線

遠野へと桜の小堤大堤

畦桜ぼつんぼつんと遠野行

風起てばうんだうんだと呆け土筆

連翹も昔語るやデンデラ野

そそくさと呆け土筆に野風起つ

うんだなあ蒨生ふ道を小一里程

花疲れ白濁の湯に身を沈め

膝を詰め遅日の遠野物語

鴉も亦民話語るや春の畑

春陰の曲り家のつと覗く貌

土筆

つぐす生えコンセイサマの石ほとり

蜻蛉

あげす翔ぶ遠野の夏も佳かろうと

どんじよ捕りザシキワラシも加はりて

あげす翔びどんじよ貌出す夏は来ぬ

雨蛙

あおびつき遠野に雨をもたらせり

早池峰（はやちね）に向ひ田を打つ遠野人

野面吹く遠野の風に花齋

連翹の痴れ者咲きに土淵町

からからに乾く田畑連翹咲く

語り部の如くに鴉打つ田見て

連翹の真昼のザシキワラシ譚

連翹咲きザシキワラシのぬし商家

田を打つや遠野三山うち霽れて

連翹のてらてら程洞コンセイサマ

真っ青な杉菜遠野の雨畑る

横柄な遠野鴉に畦青む

きつね雨遠野鴉を濡しけり
たんぼぼの黄の瞬けるカッパ淵
日の暮れて遠野の雨のすかんぼ道
杉菜に雨淵の河童を喜ばす
きつね雨遠野盆地を駈け抜けり
すかんぼの雨の遠野を後にせり
遠野の雨杉菜の青を烟らせて
田起しの小田の畦草なまなまと
カッパ淵遅日の祠一つ置き
春草の生うて河童の皿の色
カッパ淵杉菜の青を流しけり
永き日のカッパに逢ひにカッパ淵
めかり時河童がすつと隠る淵
盗み見る河童が其処に杉菜原
濡れ河童杉菜陰より窺へる
遠野巡りとぼらとぼらと蓬道
ひつつみに遠野巡りの昼餉とる
語り部の五徳の嘶めかり時
白き蛇殺める咄まめかり時
遠野の子手つこつないですかんぼ道
語り部の火箸叩いて締めくくる
貧相な花菜に遠野巡り果つ
蓬生の雨に霞める遠野去る

北上

みちのくのさくらさくらと尋める旅
北上の楊青める頃の旅
水上に水鳥迂る楊どき
楊どき北上川の水の輝
辛夷咲く北上山地高曇り
北上川

北上の桜ぼんぼん川堤
淡緑に北上川の水の春
北上川一流水に鴨を置き
北上川鶯色を湛えけり
割烹
対岸の花を肴に枕流亭
北上川（きたかみ）の水うち延べて朝ざく
ら

堤ゆく人の豆粒さくら時
夕雲も花の色帯ぶ川堤
一頼り花が暮ると夕雀
雪洞にすいと灯の入る花堤
北上川の夕べ水（み）明り花明り
堤より花の散り込む遊び舟
北上川の流れに乗れり花見舟
遊び舟北上夜曲流しつづ
ずんずんと桜堤の中に入る
一幅の絵となる桜鳥を入れ
ジョギングす北上川の花堤
北上川柳緑二花紅
北上の花の堤へ渡し舟
北上のたんぼぼ堤花堤
葱坊主北上晴れと申すべき
北上川をレガッタのぼる花見どき
花堤曲つて曲つて流る川
対岸の桜にハツと長堤
北上川の夕日万朶の花染めて
北上川の流れやさしく夕ざくら
楊菜ゆ北上川に夕迫る
北上の花を一夜に散らす雨
北上川胡桃の芽吹き遅れぬて
舟底をこする流水舟遊び
北上の楊桜を引立たせ
虎杖のよろぼひ立てる長堤
北上川の白瀬見せつつ朝ざくら
虎杖の芽に北上の川波起つ
北上のさくらと朝の川の色
高橋放浪児「春光に生きとし生けるもの動
き」
春光の恰く北上吟社の地
密々と鳥語交せり花の隙
落花踏み歩む堤よ北上よ
北上川の堤のさくら名を高め
花陰に葉っぱ覗いて朝ざくら
北上川の淡緑の水朝の花
川波の朝のうねりに河鹿鳴く
北上川の朝の水勢さくら満つ

北上の川風受けて朝ざくら
胡桃の芽まだまだ固く大河の辺

民俗村

曲り家の山吹どきの目暗がり
曲り家の背らにバツと令法の芽
曲り家の戸口越しなる濃山吹
曲り家の遅日の当る鍵座敷
南部曲り家土間を伝ひて昼蛙
あめんぼう金釘流に文字を書き
曇天を蹴つて田圃のあめんぼう
浮草を震はせ鳴けり山蛙
この山のごごみは長けてわらび採
ガンは「野辺の送り」の諸道具一式を納め
た小屋
ガン小屋の裏手に咲ける山桜

雑草園

松葉乗せ雑草園の郵便受
通草咲く三艸書屋に立ち寄りて
北上の草萌ゆ頃の雑草園

平泉

陸中の旅せり代田冷のなか
代田水湛え陸中雨の中
陸中の粗鋤田打ち夜の雨
つくづくしこんな処に芭蕉句碑
花なづな義経一行逃れし地
ホテル
花巡り今日の泊りは武蔵坊
かがんぼのとり継りある脱衣籠
旅立ちの朝の目覚めはががんぼと
開ける日のうすぼんやりと代田水
高館は松の緑のその上に
高館の落花しづしづ静の舞
高館の風花屑をほしのまま
遊覧バス
花吹雪く寺を巡りて弁慶号

中尊寺

中尊寺山号

関山の花の吹雪に仁王立ち
胸襟を開けと許り花明り
御開帳一字金輪仏頂尊
秀衡公
花に似て面差し匂う念持仏
花冷えに頬染め秀衡念持仏
花冷えの念持一仏頬を染め
秘仏召す五智の宝冠花冷す
御開帳梵語ぼろんと唱えみて
花咲かすお力も持つ仏にて
臙にて清衡の目の夜光貝
清衡が夢みし花の仏国土
清衡の夢のいろなる紅支垂
吹き荒れて飛花横なぐり弁慶堂
花どきの弁慶堂に仁王立ち
山蛙ころろころろと弁慶堂
山吹の寺訪ひ阿弥陀来迎図
山吹の光射し込む旧覆堂
旧覆堂脇に続々ぜんまい生ふ
光堂句碑へ二筋若葉光
ひんぷんと飛花とぶ方に衣川
後三年役のいくさ場遠花菜
衣川遠目に楊錠びぬ
見渡せば楊霞みて衣川
楊生ふ立往生はあの辺り
弁慶の立往生は楊の辺
春陰の山椒魚の大卵
花吹雪喰らひ遊山の足もつれ
義経の怨思はるる花吹雪
花越しに阿部館へ目を馳せぬ
光堂出でて芽吹きのみつ只中
光堂大扉花冷えに到りけり
胸元に遺る金箔木の芽冷え
ひやひやと芽吹き風の風や光堂
花屑が溜る金堂雨落構
春筍や牛若丸の身の軽さ

毛越寺

毛越寺の花の曼陀羅蜘蛛の網
山吹咲く毛越寺道を三々五々

義経に背く泰衡濃山吹

遺されし蓮弁二片苔の寺

たそがれの光帯びつつあめんぼう

毛越寺の山吹栄ゆる鏡池

極楽を擬ふ池に水草生ふ

衣川

衣川橋にて降車花の旅

来てみれば雀隠れの衣川

駒返る草のあなたに阿部館

衣川蛙に偲ぶいくさごと

種池に屈みぽつりと独り言

代田水澄みに澄みたり鶯のこゑ

逝く者は大方逝けり代田水

衣川やいのやいのと代蛙

衣川村の蛙の喉自慢

田蛙の衣川村合唱団

たんぽぽに村内放送よく徹る

南部弁丸出し蛙啼きにけり

雨粒の水輪ひろがる代田水

田蛙もこゑひそまする矢来の雨

衣川橋のたもとの古草よ

虎杖の隆と弁慶ふんばる地

ひつつめに腹のぬくもる夕蛙

衣川村の田蛙夜もすがら

一夜荒れ濁りのとれぬ代田水

一夜荒れ何も映さぬ代田水

阿部館跡に雀の帷子生ふ

達谷窟

毘沙門天蝦夷（えみし）に睨み利かす寺

山吹に奥州鎮護願う寺

悪路王籠りし達谷窟おぼろ

悪路王此処に討たれて大馬陸

悪路王生まれ変りのかがんぼか
くちびるの分厚く日永のまがい仏
達谷の岩屋へやぶれ傘の道

厳美溪

花は楚々岩は恢々厳美溪

溪底の甌穴に飛花あやまたず

足を置く岩が決りぬ舟遊び

須賀川

見頃なる意中の牡丹訪ね見ん

発送の牡丹苗木は横浜まで

早過ぎて木（ボク）の牡丹の固蕾

申し訳なささう牡丹の固蕾

たてがみの如く牡丹に花弁あり

唐物の一色違ふ紅牡丹

露地植えの牡丹遅れて鉢物見す

顔程の牡丹に寄れる車椅子

接木用芍薬莖持ちにけり

日は淡く牡丹の親の芍薬に

牡丹の好む赤玉土加え

株立ちも古色蒼然牡丹畑

養生の牡丹の古木花を矯め

須賀川の主（ぬし）の牡丹と云ふは是

須賀川の珍（うず）の「昭和の夢」牡丹

其の上（かみ）は薬用牡丹わつと咲く

牡丹に寄す侍従長筆おのみうた

春先の牡丹の手入れもくもくと

洛陽の牡丹と云ふを神妙に

牡丹守盛る牡丹の地味を云ふ

薬用としての牡丹の在来種

祖（おや）牡丹撰津の國より持ち込みて

ぼうたんは扱措き園の松古木

すっぱりと芽二つ残し牡丹剪る

牡丹園ガイド手入れをこもごもと

風嫌ふ牡丹の葉剪り大切に

牡丹剪る手捌き音に出でにけり

水刷けがよくて上出来牡丹かな

牡丹は剪らねば剪ればよき花を

花過ぎの牡丹大輪剪り洩る
煽られて牡丹の彩新たにす

中国牡丹

豆緑の牡丹と云ふはレタス色

竹灰で養生古木大牡丹

聞けば…

牡丹の手入れ総勢二十名

仄明く提灯吊りの八重桜

起き抜けの母うち屈む牡丹の辺

金沢文庫

擗吹く風も若葉もなよなよと
葉ざくらの下に自転車入れゆけり
葉桜の葉影の懸かるサドルかな
蛇穴を出づる珍事に行き會はせ
木漏れ日に蛇の舌先ちろちろと
草叢に蛇の尾隠れきるまで居る
仁王門階（きざはし）を蟻駆け巡り
階の壁を見上げて蟻停止
蟻一匹階の角曲りきる
蟻蟻と目を遣る先に亦も蟻
大風に吹き曲げらるる蟻の道
屯せる蟻みて空腹覚ゆころ
山門の蟻に見限りつけ小屋
山藤にとろろと鳶のこゑ降らす
たもとほる人に背を向け浦島草
葉ざくらにならむとつよき風を受け
園児等のこゑ掛く亀の子亀之助
亀の子は首から泛かむこと覚え
水馬試し走りの朝の池
見晴らしを得むとのぼれる五月山
懐旧
腕白に山は変らず萌ゆみどり
褐色に芽吹き支度の孔子木
魁（さきがけ）をつとめる牡丹殊勝なり
魁の 一花百花に代らむと
ホバリングする虻に貌突き出して
方向をくるりと転じ虻の尻
一昨夜一荒れありし山の藤
山藤の褪せるいっぽう日は虚ろ

江ノ島
紫木蓮は失望のいろそれも散り
失望のいろを泛べて紫木蓮
紫木蓮滝ノ口にも腰越にも
腰越状したためし地や諸葛菜
竹秋の風鳴り出づる滝ノ口

大南風オープンカーにコリー乗せ
江ノ島土産さざゑ売るこゑ蹤いて来る
階（きざはし）攀ず足許を見て椿見て
階に零れて咲けるすみれ草
階にちよこなんと載る落椿
崖椿もう一つ向かふ崖椿
八重桜も辯天さまもぼつてりと
轉りを妙音辯財天聴けり
春落葉降れるや妙音辯財天
花のしじま琵琶搔き鳴らす辯財天
検校の墓にも詣で島日永
海空の色を一つに諸葛菜
諸葛菜御岩屋道のとば口に
岩畳蟹追いかけて追いかけて
セルロイドバケツの底を鳴らす蟹
ひざら貝など見て日永の島巡り
巖窟に裸辯天舟蟲這ふ
巖窟に萬の舟蟲勢揃ひ
神妙に裸辯天見て暮春
花吹雪く寄進燈籠市村座
奥津宮
抱一の亀に鳴かれて島巡り
鳶のこゑ島の椿を真つ赤にす
島の著我活けて茶店の富士見亭
追ひやれど膝にまたくる島の蠅
砂浜に足投げ出して日永人
八重桜の房ごと飛ばす風が出て
植物園
オリーブの幹ちかちかと薄暑来る
君が代てふ玉椿白一辺倒
春陰の大明竹（たいみんちく）に噎びけり
雨風に一夜は荒れしチューリップ
樟脳舟めきしヨットが眼下馳せ
烏山椒しぶしぶ芽吹く島に来て
こめかみのあたりむずむず花菜畑
かがよへる花菜くしゃみを誘ひけり
「燕」てふ列車がありぬその昔

特急にその名止めし乙鳥

たもとほる若宮大路八重桜

著莪咲いて北條高時自刃の地

足伸ばす松も緑の大仏へ

こでまりの寸分違はぬ花連ね

白山吹雨清浄と降る許り

チューリップだあれも訪ねて来ない昼

彼岸荒れ塔婆に塔婆応へゐて

さつぱりと又ぼつてりと咲くさくら

悼三浦勲さん

雉子となり富士の裾野を啼き渡れ

磊落な楯の落とせる春落葉

朝雀桜葉降る森歩く

精悍な蔓振り上ぐるやぶからし

人憩ふ楠の緑陰檜の緑陰

をだまきの煙管のごとき首を垂れ

緑陰の風に開ける文庫本

咲く薔薇の匂ひの移る午の風

グラビア版カレンダーー繰り薔薇と裸婦

サロメ

剪り取りてヨハネの首のごとき薔薇

一政の龍三郎の千慮の薔薇

咲きほこる薔薇に腐心の老大家

一政の心頭の薔薇真くれなゐ

妻の云ふ予感当りて薔薇崩る

緑立つ当家の主健在か

風吹けと促してをり白一八

この杜の何處かに子育て鴉の眼

下闇の著莪に通る日燦爛と

厳肅に楠の大木若葉せり

楠仰ぐ人と出会へり若葉どき

若葉して大楠風を取り込みり

大楠は森の貴公子若葉せり

懐をひりびろ開けて楠若葉

もくもくとおのれを覆ふ楠若葉

この森で一番高き楠若葉

朝まだき紫蘭は伏目がち

ヒトノゲノムの解説競争めかり時

ヒトノゲノム解説せよと亀鳴けり

葉ざくらの葉末までゆきわたる風

葉ざくらより葉ざくらへ押し渡る風

楠若葉揉みぬし風の吹き下ろし

都会派のビル主好む栃一樹

栃若葉ビルの谷間を風抜けり

桜葉時経て土に還る色

住人の鴉目覚むる森若葉

絮たんぽぽさつと素首を刎ねられぬ

昼休みのサラリーマンに絮たんぽぽ

絮たんぽぽ吹き割る風の肺活量

これ以上呆けやうなき絮たんぽぽ

青天の昼月いろの絮たんぽぽ

水無月の清涼飲料びわの味

ででっぽう青葉曇りの森震ふ

罷り出て暮夜の雨に貌濡らす

夜の臺の鼻面に降る小糠雨

のた搏って蛇体のみどり楠若葉

蚕豆をつまむ感触これも匂

蚕豆剥く中に混じれるみそつかす

大は小を兼る蚕豆ほおばれる

蚕豆の莢の辱に指当てて

てのひらを差し出すごとく水木咲く

ジョージグロス回顧展

回顧展楠の花降る只中に

夏来ぬとグロス引つ掻くヒトラー像

諷刺画の鷲ペンに籠る夏の音

葦ペンの豚の屠殺凶暑を覚ゆ

ハイルヒトラーグロスの描く髭薄暑

グロスの街キリコのマネキン昼寝覚

展観の眼を休めよと桜の実

もくもくと泥巻き上げて亀泳ぐ

浜田知明 彫刻による諷刺

薄暑来て「アレレ」浜田のギャグ世界

画展出て薄暑の亀に相対す

葉叢より顔覗かせて桜の実

見つけらることをうれしく桜の実

薫風に首洗はるる池の亀

わだかまりおのずと解けて楠の花

降る雨を白めて楠の花咲けり

神宮の楠吹く風にふかれきし

煽られて嘶くごとし楠若葉

靡きては馬のたてがみ樟若葉

鎌倉散策日傘携ふ妻連れて

椎咲いていざ鎌倉の比企ケ谷

虚子にして詠める紫蘭の句を知るや

新築の家の瓦と柿若葉

薯の花常呂の友の顔重ね
ぽっかりと浮びて亀の鼻の穴
日傘して次に浮き来る亀を待つ
本宮の雨湿りして楠若葉
甲羅干しなどして亀の子亀之助
萍に鎌倉の昼深きかな
びらびらと浮葉を潜る稚魚の群
蓮丸葉ついと流るる風起ちて
称名寺

演目は楊貴妃万緑栄ゆる中
野外能さみどり差せる橋懸り
高張りに万緑染みて野外能
万緑の中にシテ出づ野外能
万緑を面に帯びて玉妃舞ふ
山若葉バチに引き据え琵琶平曲
緑陰に徹るすつばのこゑの張り
楊貴妃を舞はす一笛若葉冷え
著我の雨とうとう来たねとご住職

● HAIKU200007sono1

赤子立つ立つとほめれば桃の笑み
ぶくぶくの素足むんずと赤子立つ
息災と云へば息災葛ざくら
誕生日庭に集まる蟻を見て
定年の後の浮世の布袋草
梅雨最中阿弥陀光りに観音竹
濡縁に落梅五六寄せてあり
紹に更はる鈴本亭の小さんかな
夕雲も枇杷色帯びて相模灘
水面搏つ雨に萍ばちくりす
蕾みては百の小坊主夏椿
萍のおどろに雨の到りけり
極楽寺鎌倉石を穿つ梅雨
極楽寺雨におどろく桜の実
傘ひらく音ポンポンと夏つばき
出で入りの傘もとりどりあぢさゐ寺
花は高みに雨はらはらと泰山木
極楽寺門の梅雨入りの潜り戸抜け
立ちませる長谷観音に百合活けて
観音の美髯畏く梅雨籠
大仏の髯こんもりと梅雨深む
珈琲店梅雨光りせる卓木椅子
改札口に吹き降りの梅雨ぼやくこと
梅雨霽れて傘もたぬ掌の在りどころ
あぢさゐの上に相模の海展け
あぢさゐの前あぢさゐの花談義
傘上下して紫陽花のだから坂
青梅雨を跳ね上げ本山大甍
朴仰ぎ定年迄の日数かな
いつときの日差し貫へり鴨足草
雨に咲き次から次と夏つばき
俳諧も百合も重くれてはならじ
海坊主繰り出す波にサーフィンす
アトリエにみどり射し込む今年竹
西田幾多郎遺宅
哲学を此処に深めぬ雪の下
あぢさゐの地挿し波濤のとよもす中
ダチュラ咲くアトリエ包む波の音

雨搏つて蟹の目いろの額の花
花殖やし日本あぢさゐ協会員
足下より歩き出しさう栗落花
雨音の裡に籠れり百合の筒
一山に雨降り足せり今年竹
潮騒の起ちのぼりくる山あぢさゐ
昼過ぎの潮の響ける山あぢさゐ
濃あぢさゐ「慕情」ヒロイン思へとや
擬宝珠にするりするりと白雨滴
木雫を吹き落とす風蝸牛
あぢさゐに雨降り足せる日曜日
柄の大きかうもり傘に男梅雨
あぢさゐのぼろんと零す白雨滴
傘の柄の？(クエッションマーク) 梅雨車
中
むつつりと苔をよろへる梅雨櫂
女貞小糠雨にも散り止めず
かたばみも花をすばめて雨宿り
谷戸棲みの生活の音す山百合に
ごとごとと江ノ電のくる梅雨枕木
しまりなく枇杷落つ江ノ電素通る辺
齒科医院逃れ出づれば立葵
浜に出づ吾と鴉と梅雨の海
潮の香をずいと押しくる大卵浪
サーファーの足掬はるる大卵浪
かうもり傘浜に突き刺し梅雨の海
地藏堂基石を登り蟻の道
サーファーの臀部凜々しく南風の中
十薬も花の裡とぞ描きける
江ノ電の乗り降り梅雨の香を曳きて
向日葵植う既に一列縦隊なす
溝浚え生垣は皆女貞
熟れ枇杷のダダツと墮ちるる投票日

上高地

大姥百合曇りても鳴る梓川

鱒ゆらとその向き変へるとき涼し

すれ違ふ蹊の涼大正池

笹原の笹彩深く夏の露

夏川に手を突つ込んで上高地

夏川の波のどんぶら河童橋

川床の石の冷え冷え上高地

川波の涼音包む山の雨

上高地天変地異の白雨あり

山巔に雨靄遣り榎桜

夏川の響き川幅いっばいに

朝涼の森は鳥籠上高地

上高地焼けと腕を返しけり

上高地真昼シヨウマの混沌と

猿が出て避暑地の自然散策路

八方尾根下山首筋日焼けして

ぶどう棚葉の隙透いて稲光

白樺の朝涼髪膚に徹りけり

眼細鳴く森駈け抜けて梓川

雨涼しく朝の大正池壊す

白樺の森に響きてヒンカラカラ

唐松岳行汗のハンカチ乾きけり

大姥百合土砂降り喰らふ磧道

黄釣舟草（きつりふね）森を貫く梓川

上高地喜雨に逃げ込む椽の樹下

上高地降られに入ったやうなもの

八ヶ岳黝きぶだうのシルエット

青帽のボーイスカウトコナラの実

幹添ひに目遣れば蝉のシルエット

バンガロー叩ける雨と白樺と

駒鳥の雨に啼き過ぐ上高地

赤松に蝉の爪音立てのぼる

二泊目も雷に憑かれて八方尾根

白熱灯蛍光灯の夏の家

兜虫相模湖町の空飛んで

りんご園りんご吊して夏休み

青りんごにぼつぼつ交じる紅りんご

稲光りんごの芯に通るべし

遠雷の子守唄めく安曇野に

白雨抜け泊りは星の白馬村

安曇野の稲妻獅子独活大写し

お花畑雨も疾走蛇も疾走

シヨウマ搏ち俄雨くる高ボツチ

墨画的一驟雨野を馳せにけり

塩尻峠指して待宵草のぼる

北信濃青きくわりんに雷籠る

稲光青き信濃の果実らに

人声の挙がるところに女郎花

たたなはる稲穂に百の目稲光

安曇野の青田のパチンコ一軒家

常念岳は墨絵の雨に巻き込まれ

夕立の臀を端折りて村通る

常念岳の裏方明し一驟雨

水を張る手も逸りけり金魚鉢

桑青く赤石山脈暑に霞む

偽八ヶ岳へ兜虫（かぶと）飛んだりまっし

ぐら

白木樺ぬうつと夜風立ちにけり

合歓の木を揚羽折しも翔つところ

トンネルのナトリウム光線抜け越後

孟蘭盆の甲府盆地を突つ切りぬ

甲府大暑快川和尚の遺偈称え

灼蔓を巻き上げ走る中央道

朝露のはらりほろりと生姜畑

日雷諏訪の雷電関の碑に

カルピスを喫し涼める上高地

日雷合はせ四本の御柱

奏鳴館（オルゴール博物館）

涼奏でオルゴール函シンフォニオン

オルゴールの円盤の穴蝉時雨

ラパロマ汗し手動のオルゴール

御柱ごろごろさんの空覗く

乗鞍の雲の白さの谿空木

白馬村寢息の隙に虫の音も

白馬村田蛙集ひ請雨経

白馬山麓青田蛙の羯諦(ギヤータイ)啼

露天湯の灯を取りに来て墜ちし虫

脱衣籠使ふ音して真昼の湯

もう一つ火蛾浮き朝の露天湯に

雪溪を一望白馬の湯に和む

白馬岳はけふ登る山にて蟬啼きそむ

ガレ場あり奈落より現れ高山蝶

岩場道チングルマ等垣間見て

真上より天つ日ハツポウウスユキノウ

残雪に三時の日影下山道

登山者に道あるやうで無いやうで

出つくわすミヤマトウキは山の涼

雪溪を下る人数目減りして

溪寄りの脇道禁ずチングルマ

一雷にびりりと搏たる鳶の翅

笹原は虫原風の通り道

二株のハクサンシヤジンケルンに待す

草臥れて瓦礫に座せばベニヒカゲ

蜻蛉の翅もガレ色唐松岳行

遠雷が一つ鳴りみて下山道

戻ると八方池の山蛙

色白の日焼けて繡線菊草の色

首腕ヒリリと日焼け尾根歩き

上高地帝国ホテルにカケス聞く

山小屋の窓辺に蠅の一頓死

カケス等に鉄分含む林間水

ハクサンフウロ心臓病める者ですが

トリアシショウマ山の白雨上りけり

驟雨来空ラゴンドラを送りけり

登つてさんざん下りてさんざん夕立山

白雨来写真教室開かれぬ

兎平駅にて夕立遣り過ごす

ケルン背に腕組み俄アルピニスト

珈琲を喫せりロツヂ「五千尺」

アマニューとアマニューの間雪溪見ゆ

蜻蛉の影落とすのみ瓦礫径

アマニューの其処左折せよ唐松岳

蜻蛉のわつと集るケルンの上

ニッコウキスゲ丘々巡り風の道

風の道即ち松虫草の道

容佳き岩のほとりに松虫草

混むでもなくまばらでもなく吾亦紅

吾亦紅間合いをうまくとりにけり

高曇り山椒魚の潜む池

雪溪の溶く音ハツポウツガザクラ

チングルマ一列登攀者一列

ガレ場にて噎れしこゑの昼の虫

後ろより兀と迫れる登山靴

雪溪を臨む此処にて小昼とす

ミヤマウイキョウ山頂は曇り易くして

しゃがしゃがとケルンを鎮む昼の虫

頂上の石は熱かる岳蜻蛉

積まれたる石の放熱夏青空

ふらふらと頭の上にくる岳蜻蛉

頂上で扇子を使ふ都会人

おにぎり喰ふ肱を廻りて山の蟻

ガンコウラン這松に沿ひ昇る風

瓦礫の上雲往きクモマミミナグサ

高山蝶吸れる後ろ姿あり

夏帽子ばかり映りて八方池

瓦礫の上尾根風吹いて十文字草

雪溪をぐいと抉りて尾根の風

風のケルン蜻蛉のケルンと登り来し

雪溪を眼下にハツポウウスユキノウ

ぼつちりと雪溪白馬岳正面

紫の風の太陽松虫草

松虫草処を得たる岩と風

足垂らし涼みあるなりケルンの端

ケルン経て風届くなり車百合

岳蜻蛉日差しの強さ知つてをり

雪溪と別の涼しさアマニューは

楔形雪溪五つ見えにけり

太陽に真近くエチゴギジムシロ
よき風を貰ひてガレ場の松虫草

岩原の灼け鎮まれり松虫草
ニッコウキスゲ丘の涼風順送り
ぼつちりと残雪の嵩イワシモツケ
ニッコウキスゲ風吹き上ぐる斜面沿ひ
うるうると繡線菊草は朝の彩
繡線菊草咲く前の色後の色
時かけて風の第三ケルンまで
今は夏の午前の日差し雨飾山
米梅にゴンドラの影人の影
九蓋草岳の日差しは斯く強く
ゴンドラの影突つ切れるウラジロタデ
ゴンドラを待ちつつ使ふ白扇子
夏の露ころりと白馬岳快晴

オオバギボシ白雲翳り易くして
露は凝りゐたりタテヤマウツボ草
ニッコウキスゲ風いちめんに吹きのぼる
白雲の雲影を得てカラマツ草
雪割草風透き通るこの辺り
雪溪の風の抜け口おお涼し
お花畑石頭にも蜻蛉来て
この辺り風の美味しき松虫草
吾亦紅好みの風が吹いてをり
見晴らしは兎も角雪溪よぎるとせん
雪溪の舌の先なるチングルマ
雪溪の風にハクサンフウロ揺れ
コバイケ草止まりやすくてベニヒカゲ
はすかひに墨絵の山へ一驟雨
一驟雨遣り過ごし山潑墨す
松虫草両手に抱え蝶の息
マンモスの臼齒のやうな岩に蝶
意地悪き岩ころ道のチングルマ
第一ケルン辺りで降られびしょ濡れに
獅子独活に大俄雨今上がる
一驟雨一岳麓を急襲す
夕立来て空ラのゴンドラ山下る
麓より牛の啼声松虫草
松虫草蛇のごとくに浮上せり
峠路のツリガネニンジン雨震ふ

トラノオのその先霧の粗く飛ぶ
夕立をざつと一ア浴び獅子独活は
塩尻峠辿れば湖の臭木いろ
御柱の曳綱とぐる巻く社殿
一驟雨一位の下枝濡れてをり
赤松に西日滲み入る峠越え
虹の緑青田の緑に伍し頭てり
驟雨来白馬の美田輝かせ
街明けて白馬の雀乙鳥
赤松の天然美林夕立す
白馬岳の見晴らしよくて余り苗
白馬村青田中より虹立てり

八方尾根晴れたり燕と山を見て
ゴンドラの吸はれゆく空朝つばめ
スキー場写真木造リフトの世
夕顔の花の零せる露見たり
向日葵の等身大の顔其処に
向日葵の朝露零れ畑の土
ゴンドラの舞ひ上りゆく真炎天
白馬村細野諏訪社
夏の露払ひ諏訪社の五兵衛杉
宮前の栃の実に凝る夏の露
百日草五彩咲かすはこの家の婆
百日草こんな彩とて咲き見せぬ
どぜういんげん朝もぎ婆に高すぎぬ
朝草より発たす豆粒青蛙
日焼けして蟹の爪色両腕
青稲穂ずつぱり浴びぬ夏の露
青田中八方温泉給湯棟
目に滲みて真夏安曇野青穂波
峰雲を掻き分け常念岳のデカ頭
雪解水引き安曇野の早場米
たたなはる安曇野米に水の音
ワイン種はロザリオピアンコ日の盛
りんご村りんご真夏の顔を持つ
安曇野のりんごに甘みつく頃ぞ
耕耘機えつちら灼熱農道來
稲作も日毎に黄金色増す田

日盛りのりんご樹木のよろけ立ち
日盛りに造るワインはジャルドネ種
常念岳の霧冷えが味噌早場米
常念岳は何時も丹誠稻稔る

両腕元湯に日焼け勞れり
白雨のえいと上れる道祖神
小用を足して湯壺に入るとせり
元湯巡り蝸季を選みけり
日盛りの元湯六花の六角堂
膚白に白馬岳の日焼け滲みにけり
あらぬ方吹きて元湯の扇風機
露天湯の板塀造り涼しかり
日焼けして下山して入る白馬の湯
湯壺にあり白馬岳で日焼けせし面々
湯上りの顔を覗きに夏燕
アマニューウにピカツとザザツと降るわいな
エゾホソイ山雨傍若無人なり
ミヤマセンキュウ雨降りだして右左
鼻白む白馬岳の雷の遠間近
ピカドカと田舎っぺえのはたた神
日焼け肌ヒリリと掛湯浴びせけり
八方尾根迅雷気合ひ入れにけり
はたた神やゝと声挙げ落っこちぬ
ゴンドラに足垂らしゆくヤマハハコ
雨脚のみるみる太しオヤマソバ
ウメバチソウ我等向き合ひ昼餉とる
瓦礫搏ちオオバセンキュウ搏ち白雨
ハクサンフウロガレ場の風に煽られて
白馬山麓星夜天然冷房裡
八方尾根月夜木蛙恢恢と
夕まぐれ蝸程に目が利いて
八方尾根山麓月夜蛙啼く
捕虫網携え雪溪渡るかな
足許もよれよれ第三ケルンに着く
勝沼の葡萄棚搏ち朝の雨
北安曇野月夜高吟小田蛙
安曇野の稲の遅速の百余日

這松の底より声す昼の虫
松虫草
紫の花の太陽霧の底
定年の生活慣らしの夏百日
定年だあ定年だあと蟬啼ける
曝書などせんとて一念発起の日
心臓病持ちに咲く花松虫草
ゴンドラは足で漕ぐべしオヤマソバ
ぶだう棚切れ目切れ目の畑道
灼け石の磧に真鴨へタリ混む
雪溪の塵波打てり金鈴花
蝸や往きに見し尾根帰りにも
八方尾根下山がたがた蝶番
健脚なご婦人トリアシショウウマの辺
ゴンドラにて空中散歩ヤナギラン
ミヤマウイキョウこの辺空気薄きかな
ハクサンシヤジンリフト減速して頂上
ガンコウラン指してピツケル振り下ろす
萱原ゆく空のゴンドラ許りかな
お花畑雲の空中散歩かな
薄雪草此処で一ア息入れゆかん
チシマギキョウ風の第三ケルン経て
登り来てモウセンゴケに顎出しぬ
ショウウマ等ちらちら兎平かな
アルプスの膝元尋常ならぬ雷
随ち方も心胆寒からしめる雷
トレッキングシューズの先の岩鏡
日盛りの磧に出れば蝶ヶ岳
夏燕朝から元湯やってゐる
アカゲラの来る木と番頭太鼓判
家に居る子供の数のかき氷

紅花隠元豆咲けば秩父に盆が来る
巡礼の寄り道オクラの花覗く
仏華とし婆の殖やせる百日草
灸花札所巡りの廻り道
武甲山どんと構えて夏休み
鉦泉に一病持ちの汗ながす
湯中りをせぬやう一服とり裸
荒川は一夜に荒るる川施餓鬼
胡麻の花咲けば秩父の盆休
ごまの花汗噴き出して止めどなし
両神山（りようがみ）と武甲山（ぶこう）
引き据え盆休
白木槿巡礼の道辿り初む
蓼の穂の跳ねまわる空祭めき
桑捨てし村にはびこるお化け桑
新牛蒡秩父の雨の荒叩き
鉦泉湯後から利き来なすび漬
湯上りの胸をはだけて冷酒酌む
鉦泉に雀斑だらけの身を沈め
鉦泉宿胸をはだけて鉦泉宿
枳の葉に夕風の出で鉦泉宿
鉦泉宿蝸の音も下止みに
鉦泉に蟬音じんじん沁むばかり
青嶺見て首まで浸る鉦泉湯
峡空に秩父蟬音の馬鹿囃子
鉦泉もゆたに蟬音の通る宿
精出して札所巡りや青芭蕉
札所寺大鉢に生ふ布袋草
堂縁に一つ載せあり蟬骸
かんかん照り雀翔つさへ億劫な
灸花七番寺へ喘ぎ坂
巡礼の秩父はかんかん照りの道
巡礼衆汗を拭ひつ会釈せり
日盛りのぶだうに甘み加はらむ
有難き片陰貫ひ札所寺
蔓灼けて困民党员弔ふ碑
関伽桶に百日紅の散り込めり

喉をさす清水手結び汲みにけり
蜘蛛の巣に顔をとられて札所道
六地藏武甲山の大き頭灼け
つんざいて暴卒の如き秩父の蟬
困民党決起の碑（いしぶみ）蟬止めて
木槿散る茲に困民党蜂起
蝸も妙音奏で音楽寺
森閑と蟻山堂を守るのみ
秩父事件蜂起の鐘を蟬抱き
秩父一円猛暑の最中寺巡り
長瀬船玉祭
岩間より現れ流燈の第一燈
流燈を闇に追ふ目の馴れて来し
流燈のライン下りとなりにけり
流燈の川下へ消ゆ岩畳
急湍に乗りし流燈間を詰めて
流燈の瞬き消ゆる早瀬かな
流燈の間合縮みつ又伸びつ
流燈の二つひつつき流れけり
流燈の一つ早瀬を大廻り
流燈の脈打つごとく打過ぎぬ
波打って流燈一つまた一つ
闇より手伸びて流燈すいと押す
流燈の道中姿川下へ
流燈のすすつと水明り伴ひて
流燈に流燈こゑを掛くごとし
流燈のおのが道筋照らしゆく
一団に流燈一つ追ひつきぬ
流燈の過ぐとき水面水明りす
流燈の一つ一つの灰明り
瞬いて流燈の灯を強めけり
流燈の二つ寄り合ひ兄妹
流燈の連なり来たる灰明り
急流をゆく流燈の数尽きず
岩陰より現れて流燈もう一つ
秩父音頭祭りの果てし町明り
流燈の弾み弾みて川の央
急流に仕掛け花火の瀧現れて

レーザービーム川面を滑る船玉祭
川風や川原花火に打ち抜かれ
祭果つ遠くに月の皆野町
長漕に懸りて花火のナイアガラ
長漕の蕎麦屋の尺玉花火揚ぐ
ぺこちゃんの顔のかたちの花火揚ぐ
赤壁に鈺三段打花火
岩畳仕掛け花火に浮き上る
花火殻落ち来る川原の棧敷席
揚げ主は秩父鉄道三尺玉
色どりもくりからもん彩花火
流燈のひかひか水面滑り消ゆ
花火卍札所の里の空にかな
流燈はさながら胡弓の音にのりて
瞬けば流燈もまた瞬ける
流れ来てあんどん大の燈籠も
流燈を映す水明りすいと過ぐ
サイダーの泡の音して花火消ゆ
傘開ききりてシュワツと消ゆ花火
花火殻落ちてそこらの川原闇
川風に花火帰りのほてり抜く
昼花火まいまいつぶろの肝を抜く
朝日銀行皆野支店の揚げ花火
目くるめくレーザー仕掛けの揚花火
くらやみの漕を浮彫り揚花火
流燈のくつつき合ふもすぐ離れ
うつつらと水明り流燈そこを過ぐ
水明りのうつつら流燈打過ぎぬ
水明りの明暗流燈打過ぎぬ
何事ぞ真上に花火揚ぐるとは
旭日の花火の煙も敗戦日
大玉にほうと一声皆之衆
尺玉の一発肝に命ずごと

先導は扇あふりつ虫送り
虫送り坂をよるよる施餓鬼旗
虫送り竹竿に鉦ぶるさげて
どんじやんと田虫送りの鉦太鼓
虫送り上り下りして二集落
虫送り九十九折坂旗昇り
虫送り昔はもつと高き竿
虫送りバス運ちゃんに見送りて
山里の自家製西瓜振る舞はれ
あきあかね先導つとむ虫送り
虫送り幟ゆらゆら村はずれ
虫送り五色のノロセ持ち寄りて
こんにゃくの煮付けに直会虫送り
虫送り道中幟押立てて
虫送り道中古老の音頭取り
山風に「ようづの虫も送るヨイ」
ゆく雲に「はやりの虫も送るヨイ」
梵天の呼び寄す厄を捨つる川
虫送り幟の笹の浅みどり

東立沢、西立沢、落合地
梵天の巡れる風の三耕地
梵天を龍に見立てて虫送り
虫送りしかと墨書の幟旗
盆がらを追ひやる掛け声山里に
盆がらの去れやと太鼓打ち抜けり
盆がらの裡に入らぬ秋津来て
盆がらは農作物の病害虫のこと
虫送り梵天作りの鉦振ひ
腰に鉦立沢衆の虫送り
くるくると揚羽の舌と百合の舌
火の粉めき山の畑に憑く蜻蛉
灸花ゆらと梵天出立す
三耕地巡る梵天虫送り
ゑのころの灼け鎮まれる浅みどり
虫送り先づは長々式次第
肝煎りの挨拶済みて虫送り
虫送り束ぬノロセは新聞紙
手締めしてさて虫送り始めむか

虫送り太鼓引き出し試し打ち
虫送り撮りにケーブルテレビ局
大太鼓小太鼓連ね虫送り
大学院生
虫送り学究の徒も加はりて
虫送り修士論文まとめむと
梵天に佳き風の出で虫送り
火の粉めく蜻蛉飛び交ふ虫送り
村の衆手拭い首に虫送り
大犬蓼垂れて山里深うする
しんかんと山の畑の紺茄子
終点の山の集落虫送り

秩父神社

夏暁の秩父神社に鳥も起き
夏暁の柞の森に鳥も起き
祭神

蝸開き八意思兼命（やごころおもいかねの
みこと）

蝉啼いて神名帳に載る総社
蝸や総社権現造りかな

秩父霊場第壹番の大施餓鬼

札所巡り秩父盆地の日に灼かる
ごまの花つんつん秩父盆地晴れ

胡麻の咲く秩父盆地を徒の旅

お祭りの秩父盆地に灼けに來し

岩魚飼う駅の水槽山女魚も居

盂蘭盆の秩父の雨が上り蒸す

めひしばにさしもの秩父の雨上がる

首削げし石の佛に蝉音降る

胡桃の木沢を覆ひて夏旺ん

札所寺二番で降られ夏の雨

二番より四番に向ふすすき道

蚊帳吊草茎の香深め往還路

夢に現る秩父原人三尺寝

こんにやくの茎しげしげと見て秩父

この猛暑忍び難キヲ忍び旅

黒揚羽迅し秩父の雨に遭ひ

蚊遣香お堂の端に札所寺

珊瑚樹の実に巡礼のやつれ旅
青栗や武甲山雲間に貌だして
地の者に聞いて大暑の札所道
向日葵もうなだれ佇てる札所道
磐ヶ根の清水を絞る窟佛
巡礼者鳳仙花にも会釈して
鳳仙花ひっそり札所寺を辞す
蝉勁く啼いて霊場一番寺
青柿の転がる札所一番寺
ごまの花秩父の雨に見舞はるる
塩辛蜻蛉（しおから）伴れ石ころ道を巡礼
す

早稲の香の沸きかへる中札所道

犬蓼の穂の跳ね継げる峽の空

ご朱印を貰ひに百日紅の昼

札所寺百日紅に汗退けり

掃かずおく庭に火屑の百日紅

団扇風いただき一番札所寺

蘭座布団十あまり一番札所寺

青田風吹き込む三番札所寺

萩を活け三番札所のご住職

かまつかに出迎へらるる札所寺

虫喰ひの曼陀羅模様芙蓉の葉

お弁当此処にてとらむ垂穂の辺

団扇など置きてもてなす札所寺

扇風機手持ちぶさに札所寺

四萬部寺（しまぶじ）の百日紅に身の透け
り

第一霊場蝉音を降らす一本杉

堂暈夕蝸の音を通す

暑に耐へて一番札所寺の竹

街道はこれから灼けむ露笹

峽の蛾のはたはたと来て停留所

朝の蛾の行方見守る草っ原

湯を浴びて秩父青嶺のいよいよや

青栗に峽の朝露降りたちて

長々と蝸聞いて鉦泉湯

窓開けて朝の蛾放ちやりにけり

湯ぼてりの後からぼつとのおぜん花

稲妻が合いの手秩父太鼓打つ
蕎麦蒔いて夫婦一服野良談義
円福禅寺

のうぜんの空不異色色即是（くうふうい
しきしきそくぜ）

百日紅どうれと山門潜りけり
佳き道を教へて貰ひ稲田道

川風に涼めるごとし葛の蔓

コスモスや武甲山はいつも雲隠れ
大滝村桑が長じてしまひけり

風船かづら祖霊送りに済ませしよ

白木槿寝そべりながら旅程組む

なみなみと垂穂も秩父酒どころ

精霊ばった吾を横目に見てとべり

しょうりょうばった一回りして元の草

花火見る旅も山下清めく

檜風呂赤き節目に蝉音沁む

露天湯の木漏れ日は夏樗より

真炎天峡田均して何植うる

ちらちらと涼しげだうの掛袋

札所寺片陰見つけ一服す

秩父霊場巡り長けたる桑の道

巡礼の途次の川風顔に当て

新涼の武甲山のガレ場歴然と

葉湯と云へるその湯に浸かりたく

林道を涼しみゆけば鉱泉宿

蝉の音の沁みとおる湯に脛伸ばす

手拭に汗を拭き拭き札所道

ごまの花止まれば汗の噴き出せる

日盛りの秩父盆地の底歩く

札所寺とんで青嶺の麓寺

汗を拭き次の札所を教はりぬ

巡礼者腕はもとより目鼻灼け

両神山を指呼に頂上涼み台

見晴らし台汗退く程の標高差

蝸どき旅の役者と長湯して

巡礼の真似事芙蓉の札所寺

大西日巡礼衆の横顔に

鉱泉に汗を流せる旅役者

一見に値する景遠堀

両神山を鎮めの嶺々の遠堀

涼とりに登り秩父のご霊場

蝉も浮かれ秩父音頭の皆野町

湧く雲も胡麻の花いる奥秩父

虫籠を抱へ乗り込む秩父線

両神山の立ちあらはるる蝸どき

盂蘭盆の秩父盆地は暑に籠る

巡礼に秩父秩父と蝉啼けり

夕光ゲの林にとほる蝸谷

昇りつむ花火の青息吐息かな

沢胡桃川音はるか下よりす

青天に秩父囃子の笛ひようと

川荒れて精霊舟のとどめらる

風死すなか巡礼衆のなみあみだ

蒼天を抜いて秩父の馬鹿囃子

揚花火どんと武甲山の肩を突き

花火揚ぐ川原に待機消防車

あきあかね稲が熟れしと告げに来ぬ
酔芙蓉咲けばもうすぐ風の盆
坂の町足のむくま風盆
石垣の上の町並み風の盆
川の音おわら流しの過ぎ去りぬ
おわら見て二階に風の通る家
風の盆朝顔の葉に灯の洩れて
二階の間開けつびろげに風の盆
したたかやおわら流しのバチ捌き
足そろと運びておわら流しかな
川風におわら流しの遠ざかる
おわら流しふらりと出でて町流す
踊り衆ぞろとお出まし風の盆
川面の灯おわら流しの町更けぬ
踊る手を横に捌いておわら衆
太棹の影が法被に風の盆
ひらひらとおわら流しの袖袂
流しゆくおわらの果ては風の闇
ぱらついて稲穂明りに昼の雨
おわら流し初日の踊り披露せり
怪しげな雲の出てくる風の盆
稔り田に富山湾より吹き込む風
風倒田をちこちに見ゆ風の盆
左右指差確認稲田の中の駅
整然と稔り田おわら流しの里
おわら流し犬は地べたに顎埋め
酔芙蓉風のまにまに胡弓の音
夕顔とおわら流しの宵迎ふ
橋渡りこれよりおわら流しの里
町々の趣向の法被風の盆
軒先におわら流しの風立ちぬ
おわら流し橋で一息入れにけり
麴屋の店先おわら流しゆく
せせらぎもおわら流しの唄に和し
雪洞にすいと灯の入る風の盆
旅土産おわら流しの切手買ふ
稔り田に二百十日の風の跡

海側の空は霽れゐて風の盆
稔り田に日本海に射し込む日
酔芙蓉いろの頬して八尾の娘(二)
くらがり鈴虫を飼ふ風の盆
鉢巻して踊る八尾の子供衆
編笠も月のかたち風盆
団扇風妻より貰ひ風の盆
風おさまる如く豊年踊果つ
格子越しおわら流しの法被見ゆ
おわら流し風に手が生き足が生き
かかし踊り片足ひよいと持ち上げて
おくにぶりおわら囃子の合の手も
肝煎り
団扇一本投げ出しおわら流すとせり
紅引いておわら流しの出を待つ娘(二)
夕顔に胡弓漂ひ初めにけり
床几借りおわら流しの宵迎ふ
踊り場に踊子散つて風の盆
風の盆迎ふ座敷に置燈籠
おわら流し地方のハイと踊締め
おわら流し地方に和して「わしやはやす」
風のごと踊の返す手返す足
女衆のおわらの腰の宙返り
おわら流し折り目正しき手の捌き
よき風が出て来ておわら流しどき
若衆の風に泳ぐ手総流し
おわら流し一踊りして夕餉とる
素通しに川原の見ゆる盆の家
おわら流し出で立ち支度垣間見ゆ
風の盆坂ゆるやかに胡弓の音
団扇風胸に送れり風の盆
立つ風におわら流しの手の靡き
公民館一息入るおわら衆
流し唄宵のおわらに染る雲
聞名寺(もんみょうじ)堂掾借りておわら
節
豊年踊り女衆退きて男衆
かかし踊両手突つ張り一文字

一对の男女のおわら流しかな
ちよいと手を空に合わせて女(め)の踊り

風の盆幕開けの風橋上に

編笠に顔伏せ踊る娘っこ

旅人の誰もおわらに染まる宵

おわら流し胡弓の冴えも嫺々と

おわら流し音色さばきも遺憾なく

おわら流し地方音色を継ぎ継ぎで

夕顔に流れて越中おわら節

揃え脱ぐおわら流しの草履に名

今町のおわら流しの浴衣柄

黒羽二重法被衣桁に風の盆

風の盆路地の裏手の路地抜けて

八尾びと門前に据ふ涼み台

越中おわら蔵の町並み流しけり

踊り手に地方も酔ふておわら節

しみじみとおわら地方の町流し

一息に唄ひ切らねば風の盆

月夜道越中おわらの高調子

男衆のおわら流しの浴衣柄

踊り手が町に戻りて風の盆

浴衣着に黒帯八尾の娘っこ

豊年や越中八尾の水うまし

灯取虫おわら流しの路地よぎり

細き路地細く使ひて町流し

縦長の町中おわら流しゆく

おわら流し踊りも一服私も一服

風鎮め祭の町の酔芙蓉

風立ちぬおわら流しの坂と路地

肩寄せておわら流しの町家並み

酔芙蓉おわら流しの音に浸る

胡弓の音風に息づく風の盆

おわら流しころと川原の水鳴れり

おわら聞く耳も達者よご老体

越中おわら八尾が体に染みついて

おわら流し赤緒の草履に灯が洩れて

越中おわら口すべり出て鄙の味

踊り手は赤緒黒緒の草履履き

地方囃す「ういたひようたん かるそに流

る」

兼六園

兼六園砂利道を踏む秋の音

園丁の触れて松喰虫(まつくい) 駆除のこ

と

旅先の加賀の地酒に蓮の実

卯辰山前に白萩うねり初め

赤松を剥がるる昼の蝉の音

兼六園ガイドの上にあきつ来て

日盛りの赤松幾つ兼六園

あか松のそらに秋津や兼六園

名園の松は美し氷水

東尋坊

東尋坊美(は)しやビールの泡透けて

寸足らず東尋坊の夏蓬

東尋坊岩間に昼の虫音澄み

ぎす載せて東尋坊の安山岩

東尋坊跳ねしバツタはいづ方へ

夏怒濤東尋坊に乗り上げぬ

磐ヶ根のゑのころ透き晩夏光

八月の磐のか黝く東尋坊

岩鼻に舟虫共々日焼けして

東尋坊末広がり晩夏光

東尋坊巡る岩場に灸花

東尋坊焼けつく岩に雨滴消ゆ

東尋坊南風に乾ける雨の跡

東尋坊舟虫に降る潮しぶき

夏怒濤岩削らんと力づく

東尋坊風に縫れし錆のころ

夏草の穂先錆ある岩場道

ひ弱なる東尋坊の昼の虫

すいと来て青嶺に懸かる雲の影

朔日の越後に入りて白木槿

穂芒のまねく越後にやって来ぬ

スワン発つごとし水上バス出づる

震災日老朽すすむだるま船
ゑのころを颯る川風震災日
だるま船みなづぶ濡れに震災日
百合鷗運河に屯る震災日
水上バス国旗を垂るる震災日
水上に翳の揺らめく震災日
蒸し暑き運河の風や震災日
夏果の運河を洗ひ雨上る
水上に日の射してくる震災日
運河べり芥片寄る震災日
水皺の生る川面や震災日
秋ついで湾内に鴨ちりばめて
にはたづみ空を映せる震災日
横浜港クルーズ先導百合鷗
水面に鷗のとまる秋の風
水皺のそこに頭つ震災日
さざなみの運河に百の目震災日
鯨刺の翼九月の雨弾く

● HAIKU20009sono2

ベルナール・ビュッフェ展

炎天来てビュッフェのエイに魅入りけり

夏瘦て魅入る吾も亦ビュッフェファン

描線の鬼才ビュッフェの百合を見よ

描線の威嚇と攻撃巴里凍る

夏場所やビュッフェの描く大之國

卓と百合ビュッフェの描線切り刻む

冬景色殊にビュッフェの垂直線

暑氣払ひ馬女々(マーマー)餃子にビール

酌む

ウルフトロジック展(スエーデン)

鱒刺にフィヨルドの涼奔りけり

白塊の鳥のデフォルメ涼氣呼ぶ

嘴を大空に入れ白蓮

日の光深空へ返す白蓮

白蓮たゆたふ風の出で来たり

白蓮清方の絵の展示替へ

四谷怪談語つてあます所なし

白蓮真昼の風のはたと絶え

清方のほゞづきの絵のほゞづき鳴る

清方の八百屋お七の紅の涼

蓮明り差して大作四百号

青芭蕉煽らるる日の清方展

萩寺に日はまだ強く萩咲かず

萩寺の確か白咲き萩未だ

おのが聲必死の蟬と聞きにけり

水を撒く母がもつとも涼しさう

真夏日の妻の寝相をしげしげと

お題目唱へる如き虫音あり

麦湯煮ることに精出す妻があり

妻沸かす麦湯に暑さ凌ぐなり

妻の夏吾が夏一つ屋根の下

つづれさせ職退きて早一ヶ月か

納涼歌舞伎怪談物に足運ぶ

歌舞伎座横「暫」に冷し珈琲とる

夏休み映画早朝割り引きにて

四谷怪談観ての戻りの足虚ろ

女郎花庭に朝日呼び込めり

食卓の小瓶に庭の女郎花

年金の出る齡となり鳩麦茶

麦湯して暑さ負けせぬ夫婦なり

一夏に飲みし麦湯の如何許

鳩麦も加ふ麦湯の香なりけり

妻の云ふ明け方近き法師蟬

久に聞く半僧坊の法師蟬

かまきりの宙ぶらりんの思案かな

風鈴を聞きつゝ予後の身なりけり

仕事人間止めて風鈴吊る家に

栗の樹下髪を叩いて蟻落す

風鈴の広長舌を聞き遣るべし

定年後麦湯に湯気のやうな日々

防腐剤真昼の脳に沁みにけり

ペンキ塗る傍らに蟻働けり

空蟬をくしやと潰せば昼の音

蟬殻は茶殻の如く散らばれり

峯青空蝸精根尽きるまで

炎天下地蜂の右往左往して

チと鳴いて寝起きの悪き朝蟬も

空蟬の容に妻の昼寐して

蟬の穴ホーチンミンの潜みし穴

一日の暑さを忘る榧青實

浜木綿や吾らは太陽族の裔

虫瘤の意気壮んなり真炎天

独り言つ夜蟬聞きつゝ寐落ちけり

じり貧と云ふ啼き方をせる蟬も

寐落ちしな暫し夜蟬のかすれ啼き

兜太居る皆野町にて盆踊り

久々の雨なれば藁出で逢へや

玄関の灯よりも明きさるすべり

灯の洩れてゐるそこ白きさるすべり

定年だあ定年だあと蟬啼ける

おのがじし励ますやうに雨の蟬

のこのこと起き出し朝の雨の蟬

競ひ啼きにいにい蟬のみそつかす
古ぼけし風船かづら送り盆
ちんまりと昨夜の芋殻の焚火屑
おがら火の焼けぼつくいに朝の雨
おがら火の焚き後に佇つしよんぼりと
移ろへる世に昼顔と蓄音機
早暁の水切り裂いて鴨着水
からす瓜火遁の術を使ひけり
葬の蔓朔日の風抱ふ
捕れたかと云へば虫籠掲げ見す
甲虫捕りに靄湧く朝の山
百日紅散り継ぐ寺の瓦堀
向日葵の蜂の巣顔に海昏れて

揚花火真上に南下空路あり
犬も瞳を真ん丸くして花火見る
風が来て花火の煙を払ひけり
村自慢田舎花火と云ふなかれ
焼夷彈落下の如く花火音
揚花火日和の風は南南東
揚花火終は爛れて大海星
揚花火此処に住み古り五十年
花火音立て込む家に飢して
尺玉に拳がる歓声両隣
傘ひらく広さ計りて花火揚ぐ
花火師の気合いの入りし花火なり
ランタンを十あまり出せる揚花火
揚花火隙間見つけて傘ひらく
花火消え芯の辺りに残る煙
花火にも前座・真打ちありにけり
百日草彩の花火が上りけり
すつと上つて百日草のいろ花火
激賞のかまつか折れて仕舞ひけり
野牡丹や定年族に仲間入り
年金の手続きあれこれ日の盛
孫の来る部屋片づけて鳩麦茶
鳴りすぎて困る風鈴調節す
さしあたり定期預金に片陰道

処方箋持ち薬局へ日の盛り
片陰来てハローワークの呼び出し日
風受けて直ぐなる幹をあゆむ蟬
鳴きながら幹昇る蟬もう一つ
太幹に蟬ひつついて鳴きにけり
しやかりきになって己が声通す蟬

さざなみの運河に百の目震災忌
蛸をまどろみの中暮れて来し
かまつかの彩なかなかに田舎寺
定年の挨拶状書き八月盡
豊の秋塩と醬油を控めに
網戸あり即ち通る風があり
素通しの風来る部屋に裸寝す
団扇よりよき風の来る一間かな
六畳間団扇手にしてごろ寝せり
新蕎麦を食（お）しつつ疎開先のこと
三尺寝俄雨来て起されぬ
引き売りの藪に当りぬまた蒸かそ
秋口の降りては埃くさき雨
かまつかの辰砂色増す昼の雨
店頭に出で来ぬ庄内一等米
秋めくと書棚の整理思ひ立ち
捨てるもの選り出してをり秋の昼
挨拶状秋じむ切手貼りにけり
秋づくと夜来の雨に触る便り
電話口に一度出たきり秋の暮
出欠の○付けてをり秋の雨
きゅつと鳴る紅茶の砂糖秋の昼
枝豆も古参ばかりとなりにけり
つきだしに水もしたたる新豆腐
竹輪の穴覗いて食せば秋の暮
雨に尾を引いて白露の紹興酒
竜淵に潜みとろんと紹興酒
かまつかにひたひたひたと小雨来る
草や木にさつと差しくる秋の雨
ぐい呑の秘蔵の九谷新走り
朝五錠夕べ三錠水の秋
読めるうち読んでおくべし雲母虫

札所巡り廢れて秩父の蜘蛛の巢道
思ひ出すやうに降り出す秋の雨
ぼんやりと秋雨の音聞くばかり
秋雨の上つて庭に差し込む日
かまつかの緋の傘雨に打たれをり
包み込むやうに秋雨降り出しぬ
野沢菜入り信州おやきこそ買はめ
打水の頃合ひ計りをりにけり
年金の沙汰あり昼寝ほしいまま
停年の吾に朝の虫昼の虫
秋霖といふかそけさに籠りづめ
同窓会の誘ひさやけし皆還曆
中戸川朝人さんに
澄み澄みて水も心も方円に
縁ありて鄙に置く墓まんじゅさげ
毛の國に地縁人縁まんじゅさげ
秋雨の音としんみり呟けり
芭蕉葉にかさと秋雨ありにけり
蟻どちにこれはたまらん俄雨
雨のあと直ぐ日が射して雁来紅
雨来ると急かされ啼きの法師蟬
はりはりと葉つばを打ちて秋の雨
肝張つていきいき鳴ける朝の虫
歯を磨き顔を洗つて朝の虫
夕刊の来る頃芙蓉の閉づる頃
ゑのころのさすらひ心地愉しめり
病葉の匂ひ濃くなる五輪塔
苔の花まろみの増せる五輪塔
秋霖や楯の裏側乾きあめ
雄日芝の旺んなる穂の花火咲き
亀は岩に手を掛けしまま秋風裡
病葉のほろろと零る称名寺
停年やつくづく亀の甲羅干し
停年や岩に干上がる亀を見て
夕刊の届く音して酔芙蓉
朝夕の虫音停年亦よろし
徳利に唐子遊戯図ちちろ鳴く
雨上り音色整ふちちろ虫
小刻みに音色つづめて昼の虫

羽蟻墜つ奇妙な夜となりにけり
便箋に羽をきらきら羽蟻這ふ
のうぜんの宙ぶらりんの糞暑し
大木の根方にも蟬啼ける森
鯊釣りしこゑの挙りて「三匹目」
岡釣りの面目かけて鯊日和
夏草に自転車ほったらかして釣
釣人の一服つけぬ日の盛
磯釣の夫に並びて白日傘
釣果問へばやあと指さす鱸一尾
夫婦釣りしてメジナタナゴを一匹づつ
上げ潮の水母運河をどんぶらこ
魚籠底に腹這ひ顎を張るダボ鯊
ささくれし波間にぴらと鰻跳ねし
割引かれ敬老の日の水族館
この夏を奮闘自家製氷搗機（こおりかき）
あすなるの高きに昇る朝の蟬
天気雨小馬鹿にしたる青蛙
夕立あと砂地の砂の呟ける
颱風一過からりと乾く屋根瓦
追風に乗りて海月の波枕
海渡る雲脚迅し月今宵
十五夜の諸の煮付けに舌鼓
鶉の木の上に望月顔見せぬ
海べりに住んで今宵の月迎ふ
職退きて妻と眺むる望の月
庭石を二つ渡りて良夜なる
満月の出を待つ吾と母の丈
大野分雨にも峠ありにけり
月明り月見団子の小法師に
中天に時間をかけて望の月
澄むといふこと一心に望の月
叡智生むぶだうのアレキサンドリア
哲学に頭巡らし青ぶだう
そのかみは蓮田その上に成りし町
晩夏の本ひっくり返し調べごと
一山の虫音の細み観月会
一山の虫音和すなか観月会
「耳無し芳一」琵琶弾ずればかはほり来

出る筈の月促せり庭の虫
大甕に芒投入れ観月会
薄明り捉え川原のゑのころ草
今日の月三溪園の松越しに
十六夜のはつりほつりと宵の雨
月に祀る芒に伍してゑのころも
観月会招待客の出足よし
十六夜の雨庭石を渡りそめ
襖越し琵琶の音締めや観月会
薩摩琵琶巴御前に火蛾の舞ふ
十六夜の池に降り込むこぬか雨
中天に今日の月上げ薩摩琵琶
薩摩琵琶七番月の春臨閣
ご大家の二間打抜き観月会
琵琶弾ず一之間襖絵水禽図
十六夜のかうもり飛んで薩摩琵琶
稲光八大竜王瞬きて
颱風のたてこんでくるこの時分
颱風のアップパークット喰らひけり
颱風の道草食うて近畿道
瞬けるテレビ画面も稲妻も
もう一つ颱風迎ふ宵の口
颱風の雨ひしひしと真暗闇
颱風の一挙一動首つびき
伝心寺の近道にして木槿路地
じだらくに一夏過ぎぬ玉すだれ
東京の三田に出て来てすべりひゆ
店頭で公達顔の通草出て
店頭で山盛りぶだうに蜂が来て
生え際のぞくつとしたる曼珠沙華
湧き出でて色白の茎まんじゅさげ
茎ぞろと生え出て月の曼珠沙華

三浦半島

稲架棒の根方にちよろとまんじゅさげ
村晴れて結（ゆひ）四軒の早稲田刈り
芋の葉に一夏過す蝸牛
ツルボ咲く墓域に足を踏み入れぬ
ほうほうとして逆光の力芝
里芋の茎ぐんにやりと野分晴れ
七十を経ての稲作呆け防止
稲架棒の端に止まれる蜂齧し
虚栗雨水の溜る毬（いが）の中
田を起つて鎮守の森へ稲雀
半ば閉づ芙蓉の花に日の巡る
蝶せせる薬わなわなとまんじゅさげ
山影にすいと吸はれてまんじゅさげ
雌日芝や細か細かに昼の虫
稲刈りの嵩は「んだな二十俵」
正夢を夢みつからす瓜の花
からす瓜呪文かけられ咲きにけり
スプリング状の細蔓からす瓜
二つ三つ九つ縞入り烏瓜
鳶の糞里芋の葉に垂れてける
稲雀ばたと翔び立ち棚田越し
まんじゅさげ茎を雪白昇りそめ
まんじゅさげ生白の茎によきによきと
稲架組んで棚田五軒の結（ゆひ）仲間
刈株の廻り萍干上りぬ
鎌倉の今昔猛り鴟の寺
秋草を押し吹き込む潮っ風
お供えの花はとみれば鶏頭花
手折りみむかやつり草の彼のにほひ
猫じやらし黄昏どきを知ってをり
東咲きのぼんぼんぼんとまんじゅさげ
稲雀上げ下げ棚田日和かな
冷房のすうすう海岸廻りのバス
夏帽子葉山廻りのバスに乗り
学校がもう直ぐ始まる夏水仙
性悪の雉が啄む早稲垂穂
稲架組んで手刈りの頃の話かな

空稲架を棚田の風が吹きぬけり
敬老日ころつと忘れをりにけり
コンテナヤードに林立背高泡立草
豆柿のころつと山峡晴れゐたり
女郎蜘蛛逆さまに秋到来す
翔び立ちて三角形に稲雀
切通し見上げて葛の花と逢ふ
虫のこゑじんじんいと稲稔る
篠の上つんつん秋津飛び廻り
谷戸住みの五軒の持ち田粳刈り
水音に彩のうっすら赤のまま
豊の秋一山越して嫁ぎ来し
柿すだれ風出て影のリズムかな
秋暑なほ食（お）すピザホットメキシカン
ランチタイム秋のシシリア風ピザを
ピザの秋アイダホスペシャル平らげて
十団子に添えて十団子由来状
宇津ノ谷の十団子の秋思ふべし
十団子にそろと秋風吹く頃ぞ
オリンピック
日本の飛魚波に乗りにつけり
大粒の青ぶだうより智慧貰ふ
ソクラテス青ぶだうより智慧貰ふ
茎によきとそれからまんじゅさげの花
茄子紺の九谷白露の小盃
海水着はちきれさうよ海紅豆
新涼の草むら這へり草の蔓
土破り出て白茎のまんじゅさげ
伴れだてり芙蓉の風と萩の風
かはほりに「耳なし芳一」弾き語り
ひっひつと聞こえて遠（をち）の法師蟬
たそがれて来る数珠玉にほとりせり
法師蟬じゅくじゅくと夏逝かせけり
埋立の蓮田思へと蜻蛉来ぬ
乗り上げし亀の両手に秋の風
家建つる音とんとんと文化の日
しやこ漁の帰船ぞくぞく夕日中
お薬師の神意を享けてまんじゅさげ

蟲の音の隙間見つけて鉦叩
咲き継げる芙蓉と起居俱にせり
未っ子と松茸ご飯ほおぼる家
松茸ご飯お替り茶碗ぐいと出し
鰻重のおん母少し箸を付け
丑の日の鰻長寿にあやかれと
鰻召せ長寿のものと鰻召せ
土用芽に切てぬ鉢を持ち出して
食さんと母を伴ひ鰻の日
顔つくる外出の妻に昼の虫
妻ともども冷房入れぬことに慣れ
秋の昼餉の献立何と妻に問ふ
鶏頭の種採りオリンピック果つ
生き急ぐこと止めにせりほうせんか
二学期のもうすぐ始まる夏ずいせん
ふところにすつと入るひと秋初風
妻と吾と旬の秋刀魚を二等分
籠る身に芙蓉は長く長く咲く
あらためて芙蓉の長き花期おもふ
白芙蓉衰微もとより承知なり
駢け廻りゐしが下火の曼珠沙華
昼からの芙蓉曇りとなりにけり
曼珠沙華満開畦に火を零す
堤吹く風に発色曼珠沙華
曼珠沙華しゅんと燃焼了へにけり
花期長き芙蓉を起居の贅とせり
シンクロナイズドスイミング咲かす四肢の
花
ダイバーのいるか跳びせる技至難
ダイバーの黄膚台頭アジア勢
山妻の促す法師蟬を聞く
聞けといふ長月端（はな）の法師蟬
聞くからに必死を過ぎし蟬のこゑ
月端（つきはな）の蟬ごゑ何処か衰へし
水引のぼつと泛かびて窟佛
新じゃがのバタ焼きほつぺた落っこちさう
蜂の子を炒り呉れ地酒うまくなる
肴とす灯しびいろの鰯大根
こほろぎの一節欲しき昼の酒

蟋蟀の音の転がれる独り酒
洋梨のおいど優しきものを買ふ
木の葉髪同窓生は皆還暦
龍淵に潜む還暦迎えけり
昼顔の遅まき咲といふを摘む
芙蓉淡々同窓会のある且
芙蓉咲く同窓会の朝迎え
つつ抜けに落語聞こゆる女郎蜘蛛
運動会あきつの殖ゆる入場門
借り出され宝さがしや運動会
ちびつこの足ばたばたと運動会
蜻蛉待つ決勝点にゴールイン
老い進む三町内の運動会
砂とばしスタートダッシュ秋天下
運動会走者鼓舞せる「草競馬」
コスモスに運動場の照り戻り
校庭に百日を経し百日草
蜻蛉より赤しよ走者の赤襦
天高く選手宣誓研せり
準備体操以て始まる運動会
上に向く蛇口もありて運動会
今年亦四つ若木のくわりんの実
物音のよく通る空烏瓜
一羽音翔たせ櫛の薄黄葉
真昼間の栗の渋取りもくもくと
サルビヤに風も染まらんばかりなり
萬両の青實ひやびや朝が来て
尻と尻くつつけ木瓜の実の双つ
さきがけの木犀一つ弾け花
木犀のかほれる袋小路に入る
高座着の絹からつむぎへ秋の昼
ここ迄と文庫本閉づ秋の雷
椿落ち傾くまに雨明り
懸案の一事果たしぬ衣被
女郎蜘蛛縦の糸張る手順見て
白芙蓉咲き加はりし庭の景
青くわりん尻辺に廻る雨傘
ときめきの色に出でたる実むらさき
芙蓉咲く朝夕に我あづかりし

木犀の魁の花今知りし
もみづれば色鳥来ませ杜櫻
雨ながらまだまだ咲いて紅芙蓉
閑日の昨日今日明日芙蓉の実
今年米うまかり今日に明日に処す
青くわりん曇日の日を余すなく
蠮螋の千人斬りの構えなり
青蠮螋生兵法の斧を振る
藁持って青蠮螋を指南せる
艶然と天日に笑まふ熟れくわりん
野沢菜の齒応えよろし敬老日
蠮螋の長身にして一徹者
蠮螋の武士は喰はねど風（ふう）の形（なり）
長き夜の寝惚先生文集読む
あっぱれの貴公子ぶりや青蠮螋
隼人瓜善意の笑みを泛かべたり
木犀のにはふ石ころ道通る
その辺の呼吸呑み込み松手入
天辺より手をつけはじむ松手入
狎れなれしき木犀の香を払ひ捨つ
仮初めの世に木犀の香を放つ
大船に乗ったつもりで白扇子
木犀に痛恨の念わだかまる
龍の玉見んとおん母うち隔み
蒲焼きなど母に奢ろうかとおもふ
敷き詰めて久留米緋の銀木犀
中天にしろがねの月銀木犀
楚々と掃く銀木犀の木の周り
香をさらふ雨は盗人金木犀
木犀の闇にかほれる家構え
出棺のとき迫りをり金木犀
本葬を済ませし家や後の月
この一角家建て替はる望の月
促され庭に出てみる後の月
弟と俱に仰げる後の月
水呑みしあと寝るばかり十三夜
舟蟲に回り込まれて退路なし
花火待つたいくつ時間星数え

海上に懸かりし虹の持ち時間
ガリバーの靴を避けんとふためく蟻
鴟鵂の区別つかぬに小鳥来る
隼人瓜叩けば陶の音したり
小鳥の名すぐ言い当つる友に蹤き
木犀の葉陰に秘むる固苔
隼人瓜けふの寒さに眼をみはる
木犀のこまごま蕾むこと一途
もう一度見てから寝ねん後の月
鶺鴒に来て土壇場の蟬啼くばかり
成りし句に揺さぶりかけし多佳子の忌
尋常な句は作らずよ多佳子の忌
静物画縞のオブジェの烏瓜
朝の虫啼けば応えて朝の虫
街騒に木犀零れ初めにけり
銀木犀花屑来世現じたり
銀木犀花屑明り来世
たうねずみもちの実これは大雑把
いかつくて何處か優しき青くわりん
犬蓼にけふの散歩はここ迄と
登庁の人に櫻の薄黄葉
木犀を打過ぎ打過ぎ尋めゆく家
ここに又強く木犀かほる家
雄日芝に降り癖つきぬ雨のそら
かやつり草背高きは摘み取られけり
木犀のたち現るる寺前町
木犀のかほる渦中に置机
雄日芝の穂先は風に古び初め
消防署前の街路樹もみづれり
週末の日聚め背高泡立草
市庁舎のユリの木黄葉始まれり
木犀のかほり深めて二夜三夜
カンナ寂ぶ花を掲げて運動場
軽金属いろの花付け泡立草
ご町内木犀の香のつなぐ路
虫瘤ももみづる頃となりにけり
一へんに鶺鴒の切り裂く夕しじま
紛れ込む蠮螋を外に出しやりぬ
木犀の花屑こんな処まで

ミヤコ蝶々逝く

蝶々に浪花をんなの粹見たり

瀬祭忌発句にもある著作権

萩叢の家盗人に入られし

出す出さぬ一悶着あり露の金

木犀の風に飛び来し一花片

如何な日も冷気膚さす日となれり

七五三辺り走れる櫂の根

幾朝をつづる芙蓉も了りけり

秋来ると茶碗をつまむ手ざはりも

湯呑に手あたたむ秋となりにけり

幾何學は好きでありしよ女郎蜘蛛

女郎蜘蛛楯円函数論知るや

雨衝いて啼き出す鴟のひたごころ

木犀の落下一夜に築地堀

木犀の花屑明り通院みち

木犀の花屑零る煉瓦路

色鳥を呼びて鎮守の主(ぬし)櫂

ピーマンにもいろいろありて独自色

● HAIKU200010sono2

北山

北山の三寺巡るや紅葉晴れ
もみづれる高雄 ホテルの絨緞も
しぐれ聞きちりめん山椒一つまみ
しぐれ過ぐ北山杉に三時の日
梅尾のけふが了ると鴉啼けり
北山のしぐれ誘へる水のこゑ
祖師絵伝しぐれ馳す音聞こえけり
さきがけの紅葉は櫟山漆
茸またたび無患子（むく）の実並べ青空
市

取り次いで高雄紅葉を巡る路

高山寺

樹上には明恵 樹下には女郎蜘蛛
三日目は晴れて高雄の紅葉狩
真つ白に明恵の咲かす茸なり
茶畑に迫る杉山片しぐれ
百段の上（かみ）から落葉搔始む
片しぐれ柿の明さを遺しけり
明恵が庵白き茸の傘張りて
一頻り萩刈る音か高山寺
あをあをの茶の実叩けば鳴りさうな
水引の花粒つぶら明恵の眼
梅尾の桜黄葉を交え吹く
階に箒を当つるしぐれ僧
走り根の恢々しぐれ馳せる寺
明恵御廟時雨明りを遺しけり
ぼこぼここと明恵が頭（つむり）くわりんの
実

階にはらと音して柿落葉

石卓に落葉ひつくりかへりけり
堂障子時雨明りの差し込めり
しぐれ避け北山杉の見ゆる簷
水引がすいと目に入る高山寺
お茶の実がしんしん冷ゆる高山寺
虫喰いの堂柱撫で昼の虫
榮西の茶種育てし露の畑

水が水打つて高鳴る紅葉谿

高雄路の豆柿もみぢ明りして
しぐれては鄙ぶ高雄の柿もみぢ
梅尾のお茶の実に凝る雨雫
しぐれんと杉は直立したりけり
茶祖明恵語るが如く露落ちぬ
露の中明恵座禅の松いづこ
秋草を鳥羽絵の兎高掲げ
露処ここに始まる日本の茶
延命の妙術使ひ茶が咲けり
明恵上人樹上座禅図いと露けし
簡短に簡短にして茶の青実
茶が咲いて明恵学びし学問所
明恵の智恵蜘蛛は樹上に罟を張れり
茶の青実曰く「阿留辺幾夜宇和（あるべき
ようわ）」とは
茶が咲けば清貧一途の明恵見ゆ
秋の夜の夜な夜なごとに明恵の哥
弟の明恵かさなる茶の青実

西明寺

川砂を敷きて時雨の通る寺

神護寺

神護寺のここで一服紅葉茶屋
まくなぎに顔突つ込んで分けゆけり
吹き起る谿風が見ゆ紅葉谿
靈刹の紅葉に凡夫透けにけり
もみぢ葉は真言陀羅尼 義趣を秘む
神護寺の紅葉明りに一凡夫

金閣寺

日が当り轉りさうな梅擬
背負籠より十歩が程の落葉掻く
大露のここに寺伝の石不動
金閣の鳳凰の上の昼の月
梅擬ガバリと鯉の浮上せり
いちめんの苔万両の濃き青実
金欄の綾なす鯉と金閣と

万両の向うを通る水のこゑ
鹿苑寺林の間の落葉搔

金閣にわいわい旅の露童子
楓（かえるで）の穴惑めく走り根よ
暫し夕つ露の金閣正面に

鳳凰の朝露を得て羽打つかに
赤松に秋の陽赤（セキ）と鹿苑寺

築地塀又築地塀山茶花寺

露けさの金閣見んと一歩寄る

金閣の金を破りて錦鯉

露燦と朝の日を得て金閣は

苔青く万両の眼を睦ける

鯉の上に鯉乗り上げぬそぞろ寒

鳥ごゑの凜と響ける梅擬

楓（かえるで）に箒立て掛け焚火守

再三の秋の金閣たのしめり

露の金閣屋根は榼と云はれても

「陸舟の松」とさやかな名を賜ふ

鯉魚石に秋亭々と立ちにけり

秋気満つ金閣を出て銀閣に

龍安寺

龍安寺自問自答の鴉のみて

白山茶花ガクと崩るる龍安寺

紅葉寺「魚鳥捕事禁」と定

秋天下十五の石をスケツチす

石庭の謂れ露けき日本語に

真昼間の石庭あるく蟻を見ず

龍安寺朝露冷えの廁借る

ちろちろと秋日の洩るる苔の上

秋闌くる十五の石と堂柱

佗助の自足の花とおもひみる

禅寺の油土塀に秋闌けて

碧眼も露の十五の石見据え

方形に秋の日容るる石ノ庭

大海の端に夕つおもひ石庭は

石庭の石数ふるも露の中

十五の石指し示す指露けかり

石庭の秋日差す縁ぬくとかり

大寺の秋の陽当る傘置場

山茶花のうち崩るるは自刃に似て

ズバリ散る白さざんかでありにけり

晨るは石庭の味秋日和

仁和寺

つと寄りて轉法輪寺道をしへ

秋蝶のあれあれとほる仁王門

臙長ける太秦の日に梅擬

色鳥の出入りゆかし御室御所

太秦のお寺巡りも竹の春

秋寂びの太秦の日が竹藪に

嵐電のゴトトン秋の昼下り

塀沿ひに秋の黄蝶や御室御所

諸鳥のこゑも染るやもみぢ御所

御室流本家の桜もみぢして

ふくよかな御室の佛菊の香に

かそけくも御室の御所の落葉搔

御所の塀内外に檜の実の降れる

仁和寺の園児見送る秋日和

曼陀羅図桜もみぢの色貫ひ

秋蔭の曼陀羅版木朱を遺（のこ）し

すと秋日御室桜の盛り土に

回廊に回廊を継ぎ萩の風

回廊を曲れば遽か秋の風

ざつくりと秋天を削ぎ柿葺

黄菊活け白菊を活け御室御所

仁和寺の回廊巡る秋風と

堂本印象

印象の秋寂びの松黒書院

仁和寺の御室で降りぬ秋袷

秋蝶沿ふ仁和寺の塀長く長く

寶物の六百余点露けしや

寶物のほかに小鳥も蔵す寺

大覚寺

さるすべりもみぢ見ながら渡り廊

初鳴のうねりて翔ぶや大覚寺

大沢の池訪ふならば月の頃

深秋の人懐かしみ鯉の寄る
うそ寒の防火用水大覚寺
嵯峨天皇ゆかりの寺の写経冷え
木斛に秋風の立つ大覚寺

化野念仏寺

しぐるるや石佛石塔八千体
化野の秋日に透ける燭一つ
化野の露の佛の背のまるみ
菊の香のありなし化野佛の供華
石白く粗く化野露佛
泡立草壮んに化野念仏寺
化野の佛居眠る竹の春
かたばみの花傾けて石佛
化野の佛の肩に糸とんぼ
化野の犬蓼の辺に欠け佛
化野の露の小法師そと生れ
化野の露を零せる多聞塚
そと生れ且つ消ゆ露の化野に

祇王寺

祇王寺はその紫苑の右を行け
祇王寺に罷り出でしよ紅葉ごき
祇王寺の佛間に暫し鴟を聞く
祇王寺の満天星紅葉小ぶりなる
祇王寺の日暮紅葉の佛間にゐ
祇女尊女祇王尊女と紅葉観る
祇王寺のお茶の実日暮れ待つばかり
智照尼の一重山茶花散りはじむ
祇王寺の楓(かえるで)もみぢほんのりと
祇王寺の柴の戸打ちて散紅葉
緑一色紅葉一色一草庵
祇王寺の紅葉見給へ月見給へ
祇王寺の日暮紅葉を踏みしめて
紅葉冷え佛御前のおん膝も
尼寺の山上山下紅葉冷え
念仏の一つも祇王寺紅葉見て
恨めしの祇王が寺の薄もみぢ
祇王寺の寵(ちよう)と音してちるもみぢ

白拍子涙のいろの嵯峨もみぢ
寵とちるもみぢを聞きて吉野窓
木像の佛御前や紅葉冷え

滝口寺

横笛をおもひ染めたる色もみぢ
首塚の由来とくとく紅葉中
庭いちめん柿もみぢして滝口寺
祇王寺の上(かみ)の寺柿もみぢ
滝口寺大き鳥来て柿つつく

嵯峨野

そこはかとなき風嵯峨の柿もみぢ
奥嵯峨の栗焦がす日の空高く
筆柿のもみぢこんな綺麗とは
化野の人肌ほどの秋日差
嵯峨道柿もたははに実る頃
秋風にぶつかり暮るる化野路
化野の露の佛にお焼香
化野の佛の負へる秋日翳
嵐山交番点す秋灯
嵯峨竹の春にしてなほつづく徑
朝顔の種も採らずに嵯峨野道
露けさの丹波黒豆どうどやす
化野の柿の下(もと)ゆき日暮道
なほ行けば竹やぶ切れて嵯峨もみぢ

落柿舎

落柿舎の虫喰いもみぢ葉とす
形よき石あり柿の句を彫らな
去来の墓小菊供えてありにけり
暮れがての落柿舎の柿小粒にて
化野の佛の肩に秋風起つ
落柿舎の古木の柿のいや高く
落柿舎の庭木のそれもこれも柿
落柿舎の前の畑の冬青菜
紅葉狩落柿舎辺りで日が暮れて

常寂光寺

露どきの苔衣被て常夜燈
秋冷のいよよ楓の走り根に
好事家の嵯峨野もみぢといふを見に

天竜寺

猛り鴟一位一位と長啼けり
兵火八度かうむりし寺紅葉して
もみづれる楓のいろは兵火のいろ
ほうほうと馬遠の作画秋翳り

枯山水巖顛頂に露を置き

当山は五山一位の寺と鴟

いわし雲天龍寺船穹駈けて

夕鴟の姿あらはに天龍寺

拝観の最後の一人鴟を聞く

鴟は去り日暮早むる天龍寺

枯山水中の一木紅葉せり

たもとほる天龍寺道鴟鳴けり

池暮れて鷺も埒へ天龍寺

枯山水風化すすむる鴟のこゑ

心鏡に紅葉写せば「随處に主」

ためらはず鴟は一刀両断に

鴟叫（おら）ぶ利害得失とる勿れ

「随處に主と作（な）れば」と鴟の申すな

り

自在境庭の紅葉に教へられ

嵐山

洛北

鴟聞きて雨の一乗下り松

洛北の雨は大粒柿の実に

冬菜沿ひずんずん下りて一乗寺

洛北の雨明るくて蕪畑

洛北の雨の渡れる冬菜畑

旅人の足下帯木もみぢせり

洛北の柿明りせる畑道

曼珠院

一葉よりもみぢ始まる曼珠院
ひやひやと枯山水につるる雨
朝の雨さくら紅葉を促せり

もみづれる寺に預かる幽霊図

雨の日の障子明りに幽霊図

しぐれ馳す寺に三幅幽霊図

襖絵の孔雀飛翔図しぐるる中

ひやひやと畳すりつつすすみけり

もみぢ寺卍崩しの欄間かな

紅葉雨庭の小鳥もこゑ潜め

ひやひやと砌打つ雨聞さゝたり

色変へず四百年の御用松

雨垂れば白きず玉紅葉寺

もみづれる傘を大きく桜の木

廊鳴らし御坊の案内紅葉寺

洛北の雨に色づく実千両

亀脣る白砂と御坊指さしぬ

雨の日は雨の明さに堂障子

清閑を樂しみながら柿熟るる

枯山水白砂に吸はる秋の雨

しるがねの秋霖弾く柿葺

曼珠院雨弾きある柿紅葉

石庭を案内の僧の秋拾

詩仙堂

丈山の髯を做ひて露の鯉

丈山の清貧做ひ十賊叢

正座して紅葉愛づるや詩仙堂

丈山の清貧ゆかし十賊の辺

葉末よりもみぢ始る詩仙堂

降りかかる紅葉の雨や詩仙堂

一本の柿もみぢ見ゆ詩仙の間

雨の柿人間くさくもみづれり

すいと消ゆ雨おもしろき十賊の辺

沢蟹も雨にもみづる凹凸竄（おうとつか）

銀閣寺

秋湿りして銀閣の白砂道

銀閣の松の手入れや大梯子
色鳥のこゑを引出す梅擬
つつつと蕪村棕栢図にしぐれ馳せ

露の他省き尽くして銀沙灘
銀閣の椿の高垣なほ続く

蕪村筆

叭叭鳥を四方に翔ばせ露襖

哲学の道

哲学の道端さくら落葉降る
哲学の道沿ひ鴨も散歩する
山茶花の散る辻左若王子

法然院

鴟のこゑ法然院に徹りけり
法然院苔に埋もれて木株朽つ
法然院雨に紛るる小鳥こゑ
もみづれる法然院に雨聴いて

永観堂

回廊を吹き抜ける風苔青し
走り根と苔の漣林間に
永観堂早紅葉（さもみじ）雨に色づけり
薄もみぢ明り差し込む臥龍廊
回廊をどんどん御坊紅葉寺
大寺の紅葉封づる杉襖
紅葉栄え永観堂の簷の雨
回廊の欄干紅葉冷えつものる
つらつらとみかへり阿弥陀紅葉どき

禅林派根本道場紅葉せり

月魄の山越阿弥陀火恋し
でんと据え秋の盛砂一文字
苔は苔紅葉は紅葉禅林寺
心鏡に写し参らむ照もみぢ
法燈を掲ぐが如く照紅葉

南禅寺

総門の簷の高々秋の暮

南禅寺道の桜も色づきて
前に行く赤き雨傘南禅寺

先斗町

先斗町珈琲店の秋灯

長き夜の灯を引き込みて先斗町

先斗町川風の入る焼鳥屋

先斗町煙草屋に入る秋灯

恵比寿神社

旅人もゑびす顔して宵ゑびす
タクシーで乗りつけ二十日えべつさん
細路地の四通八達ゑびす講
賽銭もぎょうさん二十日えべつさん
傘干して神籤も売りてゑびす講

清水寺

がやがやと鴉啼へ秋の暮
清水の秘佛に見ゆ秋の暮

東寺

お薬師の広庭借りて弘法市
大日如来（だいにち）さんにこにこ東寺の
秋日和
一塔と秋雲あれに東寺見ゆ
塔描くかりがね色のパステルに
能登産の月夜茸とぞ掌にとりぬ
九度山の柿も売らるる弘法市
隼人瓜ふくぶくしきを選びて買ふ
弘法さんの縁日みたらし団子焼く
煤けても不動明王火恋し
壇上に大日如来（だいにち）露けき印結ぶ
秋晴れの露店びつしり弘法さん

東福寺

当山の寺観紅葉を添えてこそ
紅葉寺宋の楓も立ち交り

紅葉どき御坊三人の下駄の音
青苔を傷めずに掃く竹箒
朗々とわたる紅葉の回廊ぞ

智積院

等伯の楓の間とよ紅葉どき
等伯の芙蓉吹く風広庭より
等伯の松剛直に秋草図
松に葵図 等伯一門総掛かり

三十三間堂

秋深む観音一体修復中
来世見ゆるが如く堂障子
秋うらら山妻陽子に似る佛
湛慶の作とうんぬん露御坊
風神も塵の袋を丸抱え

養源院

宗達の睨み獅子ノ図冬隣
宗達の松の松ノ間秋寂びて
宗達の竹描の象身に沁みぬ
ひやひやと踏みてうぐひす張りの廊

雑

若冲忌鯉に遊ばせ貫ひをり
身に沁みて梅原の赤裸婦の赤
京菓子の紅ちりばめてもみぢ季
錦繡の秋のホテルの作り瀧
千両もよき色を得よ八瀬の雨
洛中の大雨に鴨らかたまりて
秋霖も京の干菓子もこまごまと
一片の唐辛子添え千枚漬
左京区の雨のコスモス高く咲く
鴨を見て京の五条の橋の上
南座の貼フダ釣瓶落し日
長き夜の南座の灯を川越しに
大壺に栗の投入れ京料理
仏壇屋紅葉の闇を負ひにけり

● HAIKU20001sono1

藤沢市長久保植物園

女郎蜘蛛あはてふためく様見んと

公園の十一月の薄日差し

チシャの木

秋日差すカキノ木ダマシといふ樹木

石路（つわぶき）の安売り咲きといふ風情

かくれ簀言はれて探す其の黒実

蜻蛉を発たせぬやうに坐る椅子

十月のバス停に垂れ槐の実

白粉花も最後の喇叭吹きにけり

排気ガス屁ともおもはぬ槐の実

木も痩せて五、六箇しけたくわりんの実

発想の閃くごとく八つ手咲く

馬力未だあるとこ見せてあめんぼう

受付の机にどんぐり二つ置き

出足よし広報に載る菊花展

厚物の菊の顛頂に蜘蛛の子来

大船植物園 菊花展

展示日に間に合ふ菊の咲かせ方

菊の名も誇らか國華晴舞台

越山てふ厚物咲きの菊に酔ふ

管物の盃咲きの濃むらさき

職人芸尽くして迎ふ菊花展

菊作り聞けばなほあるその奥義

七本立厚物菊のこころが顔

顔とは正面のこと

懸崖菊摘芯佳しといはれても

台湾ふう中国ふうのもみぢ季

菊に石抱かせる術（すべ）に道理あり

菊作り語る道理に頷けり

盆栽の根上りの菊ひようと立つ

石付きの盆栽の菊裏も見て

石付きの菊の作りの裏話

審査員菊の根張りを云々す

見下ろして菊の直幹作りかな

一の枝殊によろしき盆栽菊

菊靡くいかだ作りといふがあり

審査員の言へる然し盆栽菊は…

大菊は我流でもよし咲けばよし

管物はによしよう厚走りはもののふ

菊花展我流仕立の鉢物も

大掴み咲きてふ菊の咲かせ方

てっぺんも覗かれ菊の品評会

手練手管尽くして菊のコンテスト

問はればばそと答へぬ菊作り

菊作りひとりたのしむ胸の内

後列の一際誉れ高き菊

「吉兆」といふ名の菊を薦められ

大会の菊の手直し大わらは

菊作りその醍醐味を胸中に

綿棒もて品評前の菊手入れ

菊の辺に跼んで菊の苗選び

中国産

お国柄花つつましき丁字菊

夫作る菊を其の妻手入れせり

醍醐味を問はれて語る菊作り

云ふならば厚物菊の大年増

コンテスト酣菊のミスミセス

伊勢菊の蕾弾けて禿咲き

嗟峨菊のかんざし挿せり太夫咲き

人ごった返す懸崖菊の前

葎簧張り先づ出来上り菊花展

七本立だるま控えぬ葎簧張り

軒雀鴉に啼かれて萎縮せり

四、五箇程留守をあづかるくわりんの実

定年の余りある日の鴉を聴く

白粉花の未だ吹き足らぬ小喇叭

呑み込まれる改札切符文化の日

黄味しぐれいろの菓子屋の鉢の菊

大井川葛の暴走止められず

霜降といふ言の葉を胸の内

懸け呉れる温情に似て実万両

神護寺

やっかいな百段現るる紅葉寺

石庭の返す秋日にしかめ面
石庭の妙吹ける秋日中
青松に金閣の金ン飛ばしけり
金閣の金よみがへる菊膽
門限のありて駆け込む紅葉寺
尼寺は日暮紅葉のいろの中
秋蝶の横一文字御室茶屋
沢蟹に雨降り止まぬ詩仙堂
気色ばむ鴟のこゑ聞き大覚寺
天龍寺訪ふ人に鴟狎れず
化野の何處で付きし藪風
金閣の鯉に深まる水の秋
屈託なき柿のみぢに洛北路
のぼりゆく鄙の都路柿あかり
もみづれる金閣の鯉曼陀羅華
金閣の鯉に差し伸ぶ露けき掌
金閣の澄みゆく水に常の鯉
さざんかの会心の白龍安寺
行く合へる高雄の柿にゆるぶ顔
笑む柿にすっぽりつつみこまれけり
柿の笑み振りまく宙に首を入れ
焼諸の黒焦げ法師炭くさき
腹立つとみえて螞螂斧振り上ぐ
螞螂の斧振り上げて吾を見据え
堪忍がならぬと螞螂大反り身
洛北の柿見てぶらりぶらりゆく
苦吟いま高雄の柿に捕まりぬ
安んずること木守柿に及ばざる
蛇去るとはつかに石露のひとりごと
柿もみぢ心ゆくまで詩仙の間
そのかみの犬の胸焼けふかし諸
柿もみぢ枯山水を彩どれり
秋風にひとり歩きの嘘ゆけり
大嘘をつく如柿の熟るる空
金閣を呑まんばかりに鯉の口
くわりん共々爽やかな顔出迎へ呉れ
山寄りに鄙の都路蕪肥ゆ
大覚寺畳廊下の秋のこゑ
洛北の畑の柿も遠目して

柿もみぢ搏つて展がる雨の音
柿を経ていよいよ鄙ぶ洛北路
人は好きずき楸邸の柿子規の柿
おもひ馳せ楸邸の柿子規の柿
一人旅蕎麦にうま味の入る頃
錆蕎麦の上に投げ懸く雲の影
自家製の蕎麦の実干せり二夕薙
薙延べ均し蕎麦の実百叩き
十日の菊おん母けふも庭にゐる
郵便受パタと音して菊日和
さむければそこら歩きぬお茶の花
どんぐりも首をすくめるさむさかな
来易くて柿の高雄の田圃道
新聞を読み漁りをり鴟日和
楸邸の柿責む顔がありありと
蕎麦談義蕎麦のつなぎに及びけり
蕎麦通のすすいと蕎麦を嚙り上げ
松手入れせねばと大王松仰ぐ
けふも亦振り籠められぬくわりんの実
木の葉髪そろそろ気になる前立腺
秋の雷地震に見舞はる三宅島
腰据えていよいよ肥ゆるくわりんの実
おやおやと箸とり直す秋の雷
叙勲記事相も変わらず文化の日
古代魚の顔の游々冬隣

秋も終のこのあめんぼの歩きやう

旅に出る思ひはいつも小春雲

首筋の辺りすうすう花八つ手

夕刊がダダツと着きぬ花八つ手

八つ手咲き背筋ぞくつとせる朝

八つ手咲きぼちぼち届く喪の葉がき

仏壇の鉦の色もて石路が咲く

「ただいま」は隣のぼうず冬隣

十月の電話の中の売口上

どんぐりの帽子がとれて仕舞ひけり

俳諧の亜流に寄らず鳥渡る

とっかかり要得ぬ電話文化の日

くわりん採る算段妻とくわりん樹下

悪さする虫に先んじくわりん採

くわりん樹と云へば快川和尚の寺

くわりん酒の焼酎二升程とふむ

大きくわりんぐるり廻して斑（むら）なき黄

まるまると肥えてくわりんの実の無疵

包丁の齒立たぬくわりん閉口す

夜の落葉昼の落葉の上に降る

むまさうに鯺鮓すすれり裘

腹底にうどん納り鴟の昼

俳も祖父の象牙の箸とる図

たたみいわし焙る祖父の手見え冬へ

お使ひはさらし鯨よ爺ちゃん子

天気図の裏日本に雪だるま

冬籠動かざること鰐のごと

職引きて冬籠る図は鰐のうたた寝

日向ぼこする図はさしづめ鰐のうたた寝

日向ぼこ気持よさそに鰐のうたた寝

投函に十一月の日差す道

葉を落とす櫛に对ひ独り言

職引きて始めて冬立つ日なりけり

立冬に要らぬ雨など降り出して

立冬の起き抜けの雨聞きすます

立冬の床起ち羽織るもの探す

立冬の雨止んでまた降りさうな

立冬の雨にユスリ蚊でんでこ舞

ユスリ蚊に伴奏添えてやらまほし

立冬の葉末明るく雨上る

立冬の電気ポットに翳添ひぬ

立冬の我がものとなる新刊書

天気予報明日立冬と締めくくる

雨往（い）んで櫛もみぢに差し込む日

産土の櫛もみづる番が来て

小春日に鰐のごと居て職引く身

目につくもの皆がさついで冬は来ぬ

水の上風吹くばかり冬一色

家裏で食ひしん坊の鴟啼けり

啼声も鋭さ増せり大冬木

寒くなりけふも鯺鮓の昼餉かな

端役にも心動かすとき冬鴟

ふたもとの嵯峨菊籠と育てられ

蒼解く山茶花これはしあさつて

雨上り易き小庭の石路の辺は

雨厭ふ白さざんかの大崩れ

雨厭ふは満開さざんかのみならず

さざんかの挽回ならず総崩れ

山茶花の花立て直す隙もなく

さざんかの落胆甚だかりしかな

ぬる爛もお試しあれと新酒着く

いっこうに何も起らぬ石路の日々

日々同じ花を掲げて庭の石路

木の葉髪搔いて訴ふ忘れ物

六十の刈らねば伸びる木の葉髪

龍淵に潜む好機を掴みけり

飽食の日々を供にす冬蠅と

雲脂飛ばす遊びごととして冬机

匂づくりも柿も分別顔をして

酒注げば朗々と鳴る菊膾

たたみいわし人肌につく温め酒

握る掌の一瞬ひやと隼人瓜

みしみしと軋る暖房試し焚き

庭石に日和よければ冬の蟻

シベリアよりどんと吹き込む寒気団

天気図の上（かみ）からシベリア寒気団

天気図に明日の横這い寒気団
天気図より部屋に吹き込む寒気団
木の葉髪妻居てけふも本を読む
冬物出す妻がもこもこ布団かけ
はやり風邪お鉢が廻り来て臥せぬ
試し焚き暖房音のちりちりと
着膨れ聞くこむら返りの直し方
めりはりを効かして雨の鴉の啼く
むく鳥の一茶漁らむ置炬燵
銀杏並木黄葉団地を貫けり
丘の上の縣立圖書館蔦紅葉
パスポート申請にゆく黄落期
一刹那初冬の鳶の影浴びぬ
落葉搔き朝から母の甲斐甲斐し
早々とポインセチアのコラム記事
人品もひとかたならぬ曆壳
咲き出せる石蔭に阿弥陀の顔ゆるめ
靴音をひとり聞きゆく落葉寒
願はくば生(き)のまま召せと新酒着く
お西さま間近夜風が頬掠め

蠶螂の斧振りかぶり豪の者
腹見せて蠶螂ひつくり返るとは
其の斧に齒こぼれなきか枯蠶螂
蠶螂の影ゆらゆらと動き出す
蠶螂の躰運びもゆらゆらと
蠶螂のいざ推参といふ構え
罷り出づ浪人風の蠶螂が
蠶螂の登攀そこに壁があり
壁色の蠶螂我家も負けず古り

水仙花泉下にあまた眠るもの
行き当たりばったり冬の蠅止る
林立の十賊戻る一刹那
石蔭蓄む虻の翅音にあやされて
同意なく此処に蜘蛛の巣張るべからず
蜘蛛の罠に懸かりし虻の粗忽者
蜘蛛の罠にまんまと懸かる粗忽者
蜘蛛の罠が顔に迷惑せんばんな

嗚呼と云ひ蜘蛛の罠に顔獲られけり
蜘蛛の罠の顔に懸かるをエイヤツと
蜘蛛の罠の糸端探る目を皿に
腰据えて料理に懸かる女郎蜘蛛
じたばたをぐるぐる捲きに女郎蜘蛛
女郎蜘蛛獲物ぐるぐる捲きにせり
網揺れて押つ取り刀の女郎蜘蛛

山の日のもう一押しに木守柿
木守柿の余生といふは透けること
葛の葉の化粧ふに山の日の加勢
木の葉ひゅうと飛ばして山の風走(わし)
る
葉を落とし樗そびゆること想ふ
人並みのもみぢ葉得んと葛念ず
夕映えの蒲の穂ホツトドック状
蹲り中州に居るは鴨許り
観察小屋窓を覗けば鴨ばかり
ラジコン機泡立草の空を馳せ
がやがやと鴨居て汽水湖中州の辺
青鷺の八頭身を水鏡
青鷺の探り歩きの一歩づゝ
くにやくにやと嘴広鴨の影曳きて
汽水湖中州の草も紅葉して
あめんぼの挙動めりはり効かすごと
セーターの試着好み木の葉いろ
毛衣の試着鏡よ鏡よと

ひろびろと酢牡蠣味はふ舌があり
旬も旬旬の酢牡蠣に若(し)くはなし
ひとり酌む旬の酢牡蠣に独語出で
これこれと旬の酢牡蠣を舌に乗せ
広島酢牡蠣を腹に納めけり
舌に乗る酢牡蠣に重みありにけり
ほたほたの広島酢牡蠣舌に受け
酔ひ早む思ひどほりの酢牡蠣なり
柚子散らし酢牡蠣ほたほた旬のもの
菊脛のこる余生をどう使ふ
老先のこと思はるる菊脛

云はるるまゝ膝を崩して菊膾
長芋の短冊切りにひとり酌む
菊好きの丹精の菊十色程

おもちや屋のお猿ブンチャカクリスマス

秋草も黄勝ちの野草摘みとりぬ

昼月の中に入りゆき穂絮消ゆ

おもちや屋の聖樹ちやかぴか景気付け

あめんぼの足腰鍛え抜かれしよ

なあるほどこれが冬芽の付き方か

老の手の甲より白し隼人瓜

小春日の石燈籠の石明り

かんばせに白ざんかの花あかり

木の葉髪同志嘗ての職場談

經濟てふからくり空回りして冬へ

何處となく色づいて来ぬ瘤樗

不細工は不細工なりにもみづれり

ぶさいくな瘤樗とてもみづれり

鴟日和本読み継いで昼になる

目につきし佳句反芻石露日

等類の右へならへに倦む秋夜

燈火親しめず雲脂より軽き句に

長き夜のどうでもよき句は読み飛ばす

そのかみの力士と云へば名寄岩

ほればれとするあんこ腹鏡里

東海の弓取り上手大岩山

あんこ形力士あづくるあんこ腹

瘦力士土俵大きく使ひ勝つ

あんこ腹吊り出しといふ力業

金星や土俵を跳んで瘦力士

かうなれば小細工効かぬ四つ角力

秋場所の力相撲となりにけり

突つ張ってはたいていなす技(て)が効い

て

和歌乃山手玉に取りぬ武双山

土つかず大きく相撲取りにけり

横綱の巨きな張り手飛んでくる

横綱の突きの一手の押相撲

どうにでもなれと当るが勝角力
大槌を喰らはす如くその頭突き
尻はたきここ一番の大相撲

解説は相撲巧者の舞ノ海

身も軽くはたき落すといふ一手

金星挙げすまふに花を添えにけり

負越しの土俵勤むも後二番

曙の張り手がぶんと飛んでくる

横綱を取って投げたる晴姿

投げられて口をへの字の武蔵丸

踏み込んでやうやく初日の出るすまふ

身体ごとあびせて勝ちをとるすまふ

待ったなしうるさきすまふ取る同志

持ちまへのがむしやらが出て突相撲

立て込める黒星同志「はつけよい」

けむくじゃらすべすべ力士相対す

背中まで毛のある力士力押し

がぶり四つ相撲のなかの相撲とる

あんこ腹波打たせとる大相撲

投げられて顔から落つる玉春日

オアフ島生まれ横綱こけにけり

口惜しや苦しくなりて引く相撲

曲者が出揃ひ星のつぶし合ひ

好調は躰に任せとる相撲

乾坤の当りに懸けぬ土佐ノ海

ぶつかって出たとこ勝負押相撲

横綱の無双の突つ張り五つ六つ

目も覚めるやうな勝ち技内無双

俳諧に我も自分の相撲とる

西の市樗落葉がすつ飛ぶ来

お西さま神武景気の世は遠く

おかめ等が夕日呼び込む西の市

西の市おかめに当る片日差し

手拍子のそれそれ熊手又売れた

熊手持つ空似の人や西の市

空風に背を押されゆく西の市

小旋風の落葉捲き上ぐ西の市

くらがりに襟を立てゆく西の市
西の市吹きっさらしに人の波
熊手売使い込んだる法被着て
熊手売洗ひ晒しの法被着て
熊手売る景気の風も持つてゆけ

灯がついてよりの賑はひ西の市
お酉さま日暮れ間近く片もみぢ
家苞におでん種買ふ西の市
お酉さま人出ぬうちの車椅子
嘶家の高張り吹かれお酉さま
眞金町交番裏手のお酉さま
すれ違ふ女の熊手つつましき
手拍子を背に聞きながら西の市
ふびす顔も商ひの内お酉さま
起つ風に身震ひ一つ酉の市
角店の熊手の小判夕日受け
落葉風びゅつと吹いて酉の市
大熊手ざくざく小判夕日受け
電球も黄金光りよ酉の市
身ぶるひを一つぶるつとおでん酒
もつ煮の香風に乗りくる酉の市
角店で酒ひっかけて酉の市
日向ぼこ鰯のうたた寝決め込めり
冬の蠅どちつかずの翔び方す
産土の落葉搔き寄せ四袋に
銀杏黄葉水屋の屋根を彩どれり
銀杏黄葉墜つときスイッチバックして
足出して生けるしをだんご虫
根植う根方どたどた足がため
はたた神篠突く雨に尻端折り
ぶらさがり咲きが得手なり花ダチュラ
花かぼちやあさつて向いて咲く一花
旬過ぎし枝豆つまみ独り言
歳末商戦泥付長葱もつてけと
職引きし年も詰りてやれ一年

● HAIKU200012sono1

冬ものの洗濯鼻唄バズデンボー

ザトペック逝けると冬のチェコ通信

鉄の肺二十世紀を駈け抜けり

人間機関車全力疾走終ゆ霜且

完走の白息仄かザトペック

ザトペック冬天を馳す登音す

木の葉髪刈らるチヨキチヨキチヨッキンナ

冬の蠅発着ふとんの飛行場

小気味よき翅音徹れり枯日向

青空に飛び去る冬の蠅の音

めちやくちやな翅音愉しむ冬の蠅

冬の蠅我からかつて飛び去れり

おつとりと大柄にして冬の蠅

冬の蠅頭だんだん澄んで来ぬ

日向ぼこ羽音の残る両の耳

太陽も軌道を外れる大きくさめ

冬の蠅球（たま）の躰をぶん廻し

冬の蠅其処と思へば又彼処

冬蠅に遊ばせ貰ふ小半時

往ったきり元に戻らぬ冬の蠅

冬蠅の飛び去り大気澄むばかり

戻るも日干しの蒲団ほつときぬ

蠅螂の背筋をぴんと張るときあり

風邪神が咳神伴れて逢ひに来ぬ

風邪神の有無を云はさず擦り寄れる

鼻風邪のティッシュペーパー山を為す

鼻風邪に占領されてしまふ四肢

鼻風邪の何にも味のせぬうどん

鼻風邪の虚ろなる眼を妻に向け

鼻風邪をこじらせ天変地異の咳

鼻風邪のなかなか抜けず白湯の味

鼻風邪の湯呑み包める虚ろな手

鼻風邪の紙屑籠をまた覗く

鼻風邪とどつちつかずの日を送る

鼻風邪は移して直るものならば

大舟に乗ったつもりに風邪ひく身

鼻風邪のじだらくに身を任せけり

風邪ごゑのうだうだ云うて茶を所望

鼻風邪にうとうと長湯せるこことち

風邪神に煙草の味を抜かれけり

風邪神の人をあやつる術中に

鼻風邪のかすむ頭に子守唄

鼻風邪の中途半端に終る稿

鼻風邪の昼餉を問へる鼻濁音

鼻風邪のやる気なき身に鞭入るる

鼻風邪を温存するにはあらねども

鼻風邪に愚図る頭を整理せむ

風邪ひいていやに素直になる自分

風邪神の下僕（しもべ）となりて咳を撒く

鼻風邪を直す呪文をうる覚え

風邪神のもう四五日と居座りて

風邪神に粗相なきやう気を配る

鼻風邪の鼻がむずむず直るらし

風邪神のけふ打晴れて御出立

「へくしよん」の大盤振る舞ひ致しけり

懐古

平熱と体温計を振るどてら

木の葉相搏つ音やがて無くならむ

心臓の葉の後に風邪薬

そそり立つ一冬木見て職引く身

ナフタリン臭き冬着と留守居せり

心中に動かし難き一冬木

樺にも膝小僧ありて冬日差す

おとしまえつけしごとくに樺散る

ポーナスのもう出ぬ冬を迎えけり

先生に見下ろさるごと冬樺

過ぐるとき頭を掠む一冬木

一目も二目も置ける冬木あり

葉を落とす産土一の瘤樺

樺の股黄もみぢ明り差し込めり

電線を一本引き込む神輿庫

木の葉髪何かメモとる安定所

木枯の夜間働く温水器
冬を前壊れて仕舞ふ温水器
冬麗の赤子よちよち歩きせり
産土の落葉を踏みに鳩の来る
とある日の氏子総出の落葉搔
木の葉の着地丁半博奕搏つごとし
大半は櫟細葉の落葉搔
ブルゾンの浅きポケット冬が来る
落葉踏み往きつ戻りつ鳩の脚
落葉踏む我に蹤きくる鳩のあり
初老とは櫟黄葉を潜るに似て
かりそめの木の葉を落とす一木立
裸木の一本づつに朝日影
冬麗の埃を立たせ孫歩く
総身を膨らませゐて鴉無言
訪問販売断りに出る石路日和
「随所に主」と思ひ定めて柿膾
某氏某日電話かけくる菊日和
壺撫づるごとき思ひも冬籠
俳諧を手づかみにして柚子湯出づ
鋤焼きを煮詰めて冬のくる思ひ
歳末の空の花瓶に埃浮く
着膨るゝ人を見上ぐる鯉のまま
会心の紅葉むらぎも熱くせり
老犬にお迎えが来て看取る冬
隙間風どのみち建て付け直す家
袂匂ふ女と相席す
舞込める雨の落葉と箱根の湯
霧の中霧に日当る一所
鼻を突く霧の中とぶ蛾を追へり
サンテグジュペリ
枯るる夜の飛行機野郎の本を読む
妻
木の葉髪若作りして何處へゆく
落葉には熊手ステーキにはフオーク
突風に一寸戸惑ひ落葉駆く
鳩止めて落葉おはる木おはらぬ木
職引いても檻樓は引くまじ木の葉髪
厚着して気位高き余り者

早々と葉落としせいせいする櫟
狷介といふ性鴉に染みつきて
駄菓子齧る眼を枯枝に遊ばせて
味はうて閒石翁の海鼠の句
読み止せば落葉濟ませし木々が見え
秋風の湖水わたるや淡水魚
干し上る蒲団の上に落葉載る
側近は側近で蟹突つき合ふ
石路といふ石路皆咲いて寝足る日々
ポプコーン抛り込むとき冬の雲
砂蹴つて初老の影を踊らせぬ
冬麗の砂零しては初老の手
海苔粗朶の一つ一つに冬鴉
冬の散歩妻も初老の手を組みて
松ぼくり蹴りゆく浜辺冬一色
文化の日形状記憶シヤツ干せり
忘年のお百度こいさん婆も和し
ポインセチア買へば蹤き来る商ひ神
忘年の岸壁の母おはことす
ほたほたの會津の見不知柿に酔ふ
ふつと湧く林火先生葛湯の句
生姜味葛湯想ひを遙かにす
臍ひおく球根芽が出て仕舞ひけり
河童忌の横須賀海軍カレー食ぶ

● HAIKU200012sono2

社会鍋渋谷は風の吹きすさぶ
社会鍋今も律儀な襷掛け
世田谷の三時を回る葱畑
赤松照る松下村塾冬日差す
日の下の梶子の実に年の塵
赤松の日差し押し照る十二月
松蔭墓所囲む枯木に鳥ここだく
早や松葉松蔭先生墓所に降る
松蔭の教へしところ冬紅葉
鷓来て松蔭先生ねむる杜
掃き浄む松蔭墓前冬紅葉
冬草の根方明るくもう日暮れ
桂太郎墓
木蔭墓ときをり鶉のこゑ落とす

豪徳寺門被り松年迎ふ
空つ風梢を渡る豪徳寺
敷松葉切り絵めくなり豪徳寺
赤松に冬日押し照る豪徳寺
枯れきりし牡丹の木（ボク）に日の移る
埃じむ紅葉潜りて豪徳寺
全盛のその季も過ぐ冬紅葉
散り遅る楓いっぽん豪徳寺
楓の緋銀杏黄葉を貫けり
風と日の加減よろしく冬紅葉
冬紅葉はつらつと見す日の加減
散紅葉吹き寄せられて土気いろ
突風の片削ぎに遭ふ照黄葉
寒鴉十羽を数ふ巨き松
寒晴れの上枝の鴉喉鳴らす
うがいする如く寒晴れ鴉啼く
井伊直弼墓所

直弼の墓所馳す落葉かそけしや
直弼の墓所の背後に互つる松
ボロ市にゆく妻髪を整えて
ボロ市の道順聞ける老夫婦
ボロ市や衣の厚きトンカツ屋

ボロ市やボロの温さの日を浴みて
ボロ市や枝に引っかけ箆を売る
ボロ市の紬の端切れ冬日吸ひ
ボロ市やレコードの音のひずむ中
ボロ市のここぞとガラクタ並べ売る
ボロ市の湯呑み茶碗を爪弾き
ボロ市やビルマヒスイを売りもする
ボロ市のビルマヒスイと言ふけれど
ボロ市に相ぶつかれる肩と肩
ボロ市の植木百両買上げぬ
ボロ市に一芽百円福寿草
ボロ市の包みと包みぶつかれる
ボロ市の浅漬けの味サツカリン
ボロ市の怪しき曆購へり
ボロ市の贗物掴まされてはならじ
ボロ市の袷の小袖煽る風
ボロ市のやかん頭の骨董屋
ボロ市の神棚積み上げられ売らる
神棚の小物びかびかボロ市に
ボロ市の日差しに膨るぬいぐるみ
ボロ市に選れる和服の裾つまみ
ボロ市の買手を待てる白八寸
ボロ市の桶の箍が日を返す
ベトナムの竹の鳥籠ボロ市に
ボロ市の客引き掛声追ふてくる
ボロ市の警戒本部掏摸を告ぐ
代官所ちりめん楓葉を落とす
年寄れる代官屋敷の羅漢楨
代官屋敷囲める枯木半日陰
庚申塔蔦紅葉して右江戸道
起つ風と共にボロ市立ち去りぬ
ボロ市の戻り足腰くったくた
東京へ出でゆく北風の診察日
木も塔も木枯季の東京へ
凧の東京に出る診察日
乗車して辺り見回す棗
年の瀬の吊革みんな塞がれり
相席の毛衣の過去推し量る

頭から見下ろされぬる裘
裘女だてらに腕組みす
毛衣の裡にてをんな何想ふ
席一つ向うの毛衣盗み見て
久に出て裸木目立ちそむ東京
日移れば意気消沈の照黄葉
東京の環状線の冬紅葉
東京の枯木連なる路飽かず
東京のはたと暮れ出す遠枯木
冬晴れの空に磨きがかかりけり
年の瀬の日ざし差し込む山手線
裸木と紅葉半々山手線
間引かるる紅葉ちらほら浜離宮
黄金国（ジパング）の枯木に夕日荘厳す
冬日向渡り歩いて病院へ
舗装路の狗尾草（葱のころ）も枯れ通院日
通院日うち仰ぎゆく師走空
診察の我が名呼ばるる暖房裡
暖房に待たさる患者青菜に塩
外来の患者持ち込む咳いろいろ
大マスク患者呼ばるる番を待つ
毛衣の何診てもらふ待合室
採血の針見ぬやうに木の葉髪
親指を折って採血十二月
採血に鬼の腕を出す御仁
糞虫の身ぐるみ脱いで診てもらふ
枯るる身に探りを入るる聴診器
着膨れて財布まさぐる一患者
通院のみちみち仰ぐ冬茜
採血して出づれば東京冬茜
膝に乗す袋の幾つ暖房車
東京から横浜に入る寒茜
茜空凍みて東京横浜間
通院の戻りがてらの冬茜
柗の花潰へしと独りごつ
宿題に手をつけるごと賀状書く
冬木の芽とくと見て其処離れけり
蹲る鳩を裸木見下ろせり

枯尾花疾風によよと哭くごとし
枯尾花曇日北の空にあり
枯尾花瘦軀吹かれてふらふらと
腰を折るごとく吹れて枯尾花
昼月のいろを貰ひて枯尾花
川芒募れる風に右顧左眊
残菊をうち眺めては書に戻る
降り出して辺りを打てる冬の雨
降り出して梔子の実に韻く雨
つつましき櫛の空に冬の雲
くわりん皆もがれし後も黄葉して
冬一色鈍色の日と街路樹と
裸木の間を抜ける通勤者
霜つつき来るリハビリの老いの杖
選り惑ふ箸にぶつかるおでん種
おでん屋の湯気の向うにおかめ顔
庭の梅そろそろ鴨の来る時分
お身拭ひいやに大きなマスクして
投函の意を削がれたるこの寒気
たつぷりと注ぎて冬の水栽培
土踏んで冷たくないかそこの鳩
狛犬の眼をむきだしに寒風裡
冬草に暮れなむとする巷の日
枯木立仰ぐ心もささくれて
歳末の売出しみかん顔寄せて
落葉駆く慌ただしさに立ち止まる
選り取りのポインセチアに目がくらむ
ポインセチア五鉢も並べ景気付
柗の潰へし花の埃じみ
産土の落葉舞い込む辺りの家
レジの脇ポインセチアの鉢置かれ
埃じむ鳶の一点師走空
埃じむ眼鏡磨きて冬籠
数え日の眠気もたらす車窓の日
数え日のねむりこけては乗り過ぐす
葉牡丹の鉢をはみだす日曜日
鏡餅不景気の年重ねけり
醜怪なざくろ抱ふる実の一つ
東京の下町聖樹飾り立て

幾たびも使へる聖樹飾り立て
美容院窓から覗く蟹しゃぼてん
下田稔さん

見舞ひしは去年の今頃枇杷の花
汝欠きし年頭の旅奥飛騨まで
毛衣の品定めする旅車中
吉書揚げ要らぬところに力入れ

こめかみの辺りしゃつきり冬立てり
太平洋戦争仕掛けし月に入る
極月に義士討入のごとく入る
冬籠葉袋を身ほとりに

十二月一日の夜の定期便
チゲ鍋に耳たぶ染めて女の子
ごつつあんと手刀添へるちゃんこ鍋
葉を落とし往時のままの瘤櫛

間引かれて残る紅葉をうち仰ぐ
性根据え大櫛冬を迎へけり
もみぢ吹き飛ばされ櫛隙だらけ
虎落笛相も変わらぬ洞櫛

頭角を徐々に顕はす一冬木
冬満月惜しみカーテン引きにけり
卓上に蜜柑のぼれる頃となりぬ
食後出すみかんに灯影殺到す

このいっぽん散るを待ちある他の冬木
箸つけぬ酢牡蠣は月の面いろ
日一日輝き増せる大いてふ
今日は今日の輝きをもち照もみぢ

洞も瘤もなべて素通し皆冬木
はつらつと通りすがりの花八つ手
大銀杏黄葉間引かれ素寒貧
露天湯の櫛落葉に躰寄せ

瘦せつぼちの私と落葉露天湯に
櫛瘤隆々木枯らし待つばかり
てのひらに移して冬の蟻這はず
日矢一条残る銀杏の黄葉透き

包まれて陽のほとぼりの干蒲団
皆散るは文無しに似て大いてふ
いてふ散る輪舞に吾等瞬きづめ

葉の散りてもう瞬かぬ大いてふ
大櫛の裸一貫風

強いられて大銀杏葉を落としそむ
丸腰の裸木なれば寄り易し
瘤隆と立寄り易き一冬木
生返事たしかめらるる木の葉髪

目つむれば宙に浮く吾日向ぼこ
車座に孫も交えてみかん剥く
銭湯出で出合ひがしらの冬茜
行き来して句作り算段枯木中

冬菊のあたたかさうに咲く日向
冬菊を前に病ひに勝てるひと
目札に止どむ挨拶冬日和
用一つ足して戻れば冬茜

冬至湯に絆創膏も浸りあて
庭伝ひ道草もせず冬の蟻
転げ込む鞠のほとりに龍の玉
山茶花をいたぶる寒の手をゆるめず

懐旧
通勤の鼻を尖らす寒さかな
図書館をぐるり取り巻く枯木立
二階にてミシン踏む音冬籠

二階にて数え日の母何縫ふや
龍の玉なんぞありそな冬館
八つ手咲き板塀が反る日向路
年金にて妻のやりくり冬珊瑚

諸雑費にあれこれ消ゆる年の金
修理費てふ伏兵に遭ふ年の暮
臨時出費あれこれ出てくる年の暮
年頭の旅の誘ひの声掛かる

恒例の初旅年金なし崩し
年頭の旅はいつもの顔ぶれで
木瓜の実や年金ぐらし引締めて
冬風の富士が見えるぞほらあそこ

煤の日の星にそれぞれ名前あり
それぞれの星に名のあり年忘れ
寛容と厳格同居冬けやき
年々に風格供ふ冬櫛

枝豆に独酌はづむ宵の口
月の面のあばた仰ぎて家に入る
ふりあほぐ月にも雀斑職を引く